
女に生きた女

ハリ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女に生きた女

【Nコード】

N4487E

【作者名】

ハリ。

【あらすじ】

没落した公家の娘の永久子^{とわこ}は結婚するために東京から長崎へと嫁いでいく。自分が女として生きた人生は何だったのか これから歩む人生には何が起こるのか 意志を強く持ち、頑なに自分の力を頼りに苦境の中で自分らしく生きようと葛藤する永久子の人生を追う

第一章 「列車」 (前書き)

初めて書かせていただきます。

ある歴史上の人物を参考に思うままに書いてみました。

かなり適当に思いつきで書いてるのでミスや時代錯誤があつて意味不明になったりするかもしれませんが暖かい目で見てやってください(^^;)
ではどうぞ

第一章 「列車」

第一章 「車窓」

汽車に揺られる

もうかれこれ何時間そうしているだろうか。

窓際の席で重い溜息を漏らすのは誰もが目を見張るほど美しい女性であつた。

「永久子^{とわこ}さん、何もそんな心配なさらんでももうすぐ着きますけえ。」

「

梅^{うめ}という初老に近い女がその女性を励ますように優しく話しかける。

「やはり早急に考えすぎたかしら・・・それとも何も考えてなかったのかもしれないわ」

口には出さなかったが永久子はそんな事を頭の中で言った。

そう、こうしたひねくれた考えこそが自分をいくらか不幸にしている明確な理由であることを永久子は知っている。だが、考えずにはいられない。そういう性格に生まれ育ってしまったのだ。

永久子は万人が美しいと称える美女である。

昔懐かしい奥ゆかしい美を備えつつ、最近にわかに世間が活気付いて「ハイカラ」と呼ばれる言葉が流行りそれらに踊らされる乙女達にも負けない程美しい。真珠の様に白く光る美しい素肌も如来の様に

整った顔によく似合い、髪は女の命とばかりによく手入れされ結われた光る黒髪も夏のはじめだと言うのに暑さを感じさせないきりりと締めた帯も高貴な風格を匂わせている。永久子が通れば皆が振り返る。そう比喻しても過言ではないくらいの美貌の持ち主と品格を合わせ持つ。

実際永久子はかなり身分の高い女であった。

この世の中公家の没落は珍しくないが、永久子はその公家の中でも有数の佐原家の一人娘であった。

佐原家と言えば公家の中でも最高峰と言われ、天皇に触れるほど近く誇り高き血が流れる一族として知られている。

しかしその中に位置する永久子の存在は少しばかり陰ったものである。

何故なら永久子は正妻の子ではないからである。

永久子の父は正妻を愛さなかった。

決められた政略婚に不満を持ち正妻を相手にせず長く付き合った妾との間に子を成した。それが永久子である。

一族により妾から幼くして引き離された永久子は父の許で育てられた。

正妻の部屋の近くを通る時いつも冷たい視線を感じた理由を知った時は大層いたたまれない気持ちになったものである。

その永久子が霧よりも深く重い溜息をついた理由は一つだ。

今日永久子は結婚するのである。

何とも急な話に聞こえるが色々な事情が折り重なりこの日となった。せっかくの花嫁となる機会に何故永久子がこんな冷静でいられるかという永久子は既に結婚を二回していることが大きな理由の一つといえるだろう。

いくら人生の中の大きな行事の一つといえど、3回も行えばまるで法事のように手馴れてくるものだ。そして永久子の性格上それは本

当に強く出ていた。

永久子の年は二十八歳である。

可憐な女学生としての華やかさは既に消えてしまっているが、まだ消えぬ若さと憂いをおびたたおやかさの間にいる彼女はそれ以上に不思議な魅力を放っている。

「わたくし私・・・少し疲れましたわ」

梅が心配そうに見る。

「大丈夫ですか？ほんにもうすぐ着きますけえ、我慢してくださいあ」

もうすぐ着くから疲れるのだ

そう永久子は言い返したいが梅の心配そうな顔をみてこれ以上動揺させるのは悪い気がし愚痴をいいそうになる口をつぐむ。

梅は大層気が利く女である。

永久子の傍女中として仕事を任された日からこの列車に乗るまで散々に世話を焼いてくれた。

朝は、静かに起こしてくれるし何も話さずとも欲しいものを運んできてくれる。

疑り深く思案深い永久子でもこれだけ良く接してもらつと悪い気はしない。

（梅は恐らく本当に良心のある女なのだろう。）

完璧とまではいえないが、数日共に過ごした永久子はかなり強い確信があった。

緑が生い茂る山々が段々と近づいてくる。

朝方駅を出たときは人混みと窓から見える工場の煙で顔をしかめた

のに、今見ている景色は何とも清らしい。

緑は心を洗う色だと永久子は思う。

結婚などという半ば強制じみた行事に参加するのは億劫であるが、この緑の美しさだけは本当に見にきてよかったと心から思う。

汽車がもうじき駅に着く。

永久子はここしばらくのこの数奇な過去を振り替える。

「私はどうしてこの地へ来ることになったのだろうか？」

去年の暮れの時点で永久子は過去に2回の結婚・離婚を経験していた。

1度目は父による政略婚だった。

十七だった永久子は父の勝手に決めた相手が嫌で嫌で仕方がなく毎日泣きはらしていた。

実の母親と離されはしたものの我が娘よと可愛がつてくれたのに何故愛してもいない男と添い遂げよと命じるのかと永久子は涙ながらに訴えたものだ。

自分も同じ様に不幸な結婚をしたではないか。

散々義母を悲しませたではないか。

そう抗議する永久子に父は叱咤を浴びせた。とうとう結婚させられた永久子は大人とは何と理不尽な生き物なのだと恨みながら嫁いでいった。

そしてやはりそんな無理強いされた結婚は長続きせず夫婦生活は二年と言う短い時間に幕を閉じた。

二度目の結婚は永久子が夢見た結婚そのものだった。

自分を愛してくれる男との幸せな結婚に少女の様に舞い上がり式を挙げた記憶はまだ新しい。

しかし永久子の夢はやはり夢と終わる。

自分を桜咲き乱れる華の女学校時代に戻してくれたはずの夫はとんでもない好色で永久子と契りを結ぶ前から何人もの女を囲っていたのだ。

自分の他に一人二人ならず数えきれない女を抱いていたという嫌悪感とそれに気付かずただ阿呆の様に薄っぺらい幸せに騙されながら暮らしていた恥ずかしさは永久子の行き過ぎた自尊心を傷付けるのに十分だった。

出戻った永久子を見て父は激しく怒り、屈辱的な侮蔑を述べた。

「ほれ見たことか。女が見る夢の最後などせいぜいこんなものだ。これなら最初の結婚で止めおいた方がいくらましかったかもわからない。何の為に前を連れてきてやったと思ってるんだこの阿呆め。」

愛を与えてくれたはずの父の心ない一言に永久子はひどく傷付いた。

全ては金の為だったのか。私を妾から引き取り育てたのも全ては結婚相手の金欲しさだったと言うわけか

今まで育ててくれた父が一度も自分に愛情を注がなかったわけでないのはわかる。

だが、自分を育てた理由に金が絡む思惑があったという事実でただただ永久子は悲しくなった。

思えば結局今回の結婚も金が目当てなのだ。

全盛期佐原の血筋であるというだけで名を馳せた学のない一族達が

没落させたこの家に残る資産はわずかである。

このまま行けば永久子自身もいずれどうなるか先行不安の身だ。

そこで父はまたも愛のない結婚を強いてきた。

相手は九州・長崎の造船業社長の嫡男だという。

年は永久子と同じ二十八で既に父の会社を手伝い順調に成金としての道を歩んでいる大金持ちだ。

東京にいた頃に少しの間だけ顔を合わせた事があったが、何だか神経質そうな男だったのを微かに覚えている。

こんな男いけると気が滅入りそうだな・・・と他人事に考えてたあの時父が既にその男との縁談を進めていたなどと誰が予想できただろう。

向こうは公家と結び付き名が欲しい。こちらは向こうの資金が目当てだ。

とても理にかなった結婚だと一族は喜んでいた。

永久子にしてみれば冗談じゃないとはねのけたくなる様な縁談だがやはり強くは出れない。

自分に落ち度がなくただの一度も人生をつまづいてないあの頃とは違う。永久子は自分の無知により離婚を経験しているのだ。もはや永久子に逆らう権利はない。

自分が権利を得た結婚も見事に失敗してしまった。

これ以上どんな方法で結婚したとしてももう満足のいくものはないだろう。

ならば仕方がないではないか。自分は一度機会を与えられたのだ。それに失敗したのだ。

幼い頃から自分は優れていると思っていた
他人とは違う特別な何かがあると思っていた

実際周りの人間の数段上の能力を持っていることは自負できる
しかし蓋を開けてみればこのザマだ。ただの未熟な一人の女に過ぎ
ない

永久子は含み笑いをした。

それを見た梅はようやく永久子が表情を変えたので嬉しそうだ。

「・・・ほんに、いい所ですけえねえ。」

「ふふ、そうだといいいけれど。」

駅が近づいて列車の速度が落ちていく。

緑の色も濃くなっていく。

あの駅に着いたところでいい事が待っているはずがない。
自分の勘がそう言っているのだ。

永久子はまた同じような含み笑いをした。

それは己の呪われた運命を少しでも軽くしようと自分を嘲る為の笑
いであった。

第一章 「列車」 (後書き)

中々ひねくれた主人公ですいません
これからどんな内面描写を深くしていけたらいいな~と思ってま
すのでどうぞよろしくです

第二章 「下車」 (前書き)

東京から長崎に嫁ぐ事になった永久子。

目的の駅に降り立ったそこには喜一という男が迎えに出ていた。

第二章 「下車」

汽車が駅に着いた。

汽笛の音が鳴り響き目的地に着いたことを知らせる。

「さあさあようやく着きましたよ奥様。」

「梅…」

「あ…」

梅が小さく声を漏らす。

2人でのいる時は「永久子さん」と呼ぶように言いつけてあるからだ。永久子は奥様と呼ばれるのが好きじゃない。奥様と呼ばれて幸せだった時期は一度もなかったからだ。「奥様」とおとなしそうに呼ぶ女中が実は夫の妾だったという皮肉を何度味わった事だろう。

「すみません永久子さん。以後気をつけますけえ勘弁してくださいあ。」

「

梅は申し訳なさそうに頭を下げた。

「良いのよ梅。さあ、荷物を運んで頂戴。もう降りなくては。」

「はい、永久子さん。」

久しぶりに外に出た永久子は着物の帯がきつく締められた範囲で大きく呼吸する。

ああ、都会の空気とは全てが違う。懐かしい里のかほりだ…

永久子は自然が好きだ。小さい頃よく旅行に行った先の山や川でブナや杉林の中を駆け回り川魚を追い掛けて日の光を浴びながらすすくと育った懐かしい思い出が蘇る。

大きく吸った息を静かに吐いた時誰かが永久子に話しかけた。

「東京からはるばるとようこそおいでくださいました。奥様。」

そこには四十くらいの痩せ気味の男がお付きを従えて立っていた。白い半袖のシャツを来て紺のスラックスに上等の革靴だ。

恐らく夫（となるであろう男が）それなりに信用をおいてよこした人物のようだ。

ただ、パリッとノリをきかせたシャツをあまり着こなせてないところを見るといつも着ているわけではなくこの日のために着せられたものらしい。

「さぞお疲れのことと存じますがこれから少し歩きますけえ。着いたらゆっくり休めますからお願いしますあ。」

東京よりの丁寧な言葉を話そうと頑張ってはいるが、中々この地方の奇妙な訛りが抜けならしい。更に変わった方言で男は話し続ける。

「良いところでそう。何度か東京に行きやしたが空気が苦しくて大変でした。やはりこういう場所にいと厳しい所です東京は。ああ、申し訳なあ。私の名前は喜一きいちです。どうぞ呼び捨ててくださいあ。」

喜一と呼べというその男は額や鼻の頭にじわじわと汗の水滴を作っている。

夏のはじめで暑がつてるにしては少し多い量だ。

初めて永久子と話すので緊張しているのだろう。喜一だけではない。その後ろからついてくる付き人達もことなく緊張している。恐らく彼等がこの様な態度を取る理由は一つだろう。

永久子は皇族の血に近い公家の身分を持つ。近いといってもその近さは他の公家とは比べ物にならない。

母親こそ妾だが、父親は天皇の従兄弟である。

天皇と言えば生き神様と呼ばれ日本中から崇められる存在だ。

実際に見る機会があっても直視はできずお辞儀をして見送らねばならないし、天皇のお顔が載っている新聞記事は決して雑事に使ってはならない。

皇后のお顔が写った新聞で大根でも包もうものならどんな恐ろしい事が待ち受けているか分らない。

そんな天皇の存在を神格化する周りの人間の反応を永久子は心の底から馬鹿にしていた。

天皇が何だと言うのか

私達と同じ容姿をしたただの人間ではないか。

私達と同じ様に老い、私達と同じ様に死ぬのにどこが神なのだろう。いつの間にか表れて崇められているだけで特別どうといった力を持ち合わせているわけではない。

現に天皇の血が混じっているとされているこの躰に流れている血は赤い。

光るわけでもない、特別美しい色と言うわけでもない、畑を耕し疲労の汗を流す農民と同じ赤だ。赤いのだ。

こんな事を口に出せばたちまちつまはじきにあい父に罰せられるであろう事は容易に想像がつく。そんな苦境に立たされるのを知りながら熱弁を振るうほど永久子は馬鹿ではない。

ただただ押し黙りそしらぬ振りをするのが一番いい方法だ。

周りもちやはやと勝手にもてなすだけだから適当にあしらっておけばいい。

慣れた作り笑いで永久子は対応する。

「色々とお気遣い感謝します。」

喜一の顔から汗が吹き出る。ただそれだけで美しい永久子なのに天皇との血の繋がりが喜一の体を一層強張らせる。長崎の田舎に住む喜一にしてみれば大変な出来事なのだろう。

永久子は表情一つ崩さずただ新しい住処^{すみか}へと向かう。カラコロと美しい紅色の鼻緒の下駄だけが音を立てる。

その下駄の持ち主の表情は暗いがその周りの人間の呼吸は明るい。

永久子の下駄が音を立てるたびに鉛のようにその下駄は重くなっている。いった

第二章 「下車」(後書き)

暗いですか??暗いですかね??;(知らんがな

どんどん明るくなってと思います。。。多分。。。。

第三章 「夫」(前書き)

喜一に連れられ永久子は嫁ぎ先へと向かう。

そこに待っていたのは富田重造とその息子であり永久子の夫となる
予定の初五郎だった。

第三章 「夫」

喜一に連れられまだ梅雨の残る土道を歩く。

梅は重たい荷物を持つてふらふらしながらついてくるが喜一が連れてきた付き人にほとんどの荷物を運んでもらってるのでいくらか楽しそうだ。

家も人も典型的な田舎道で開いている店も昔懐かしい商いの空気が漂い永久子は落ち着いた気分になる。

父の別邸がある東京で長い間暮らしていた永久子だが東京に慣れる事はできなかった。人が齷齪あくせくと日夜問わず働き毎日何か新しいものが建ち土地を埋め尽す度人の心も何かかけだるいもので埋め尽され余裕がない感じがした。

望まない結婚のために降り立った地とはいえ忙しない空気のないこの土地は中々良い。

これが「任務」のためではなくただの旅行だったらどんなに良い気分だろう。

そんな事を考えてる内に喜一が永久子に話し掛けた。

さっき汗を木綿のハンカチで拭ったばかりだというのにまた汗を吹き出している。

「ここです。このお屋敷になります。今案内させますからねどうぞ入らってくださいあ。」

そこは途方もなく大きな屋敷だった。

一個人の邸宅として永久子が想像していたものよりかなり大きい。庭も含めたらちょっとした広場くらいの敷地だろう。

だが、昔からある由緒正しい家と言う風格はない。屋根や塀などの作りはかなりしっかりしているが、どちらかと言えばあまり年月が経っておらず比較的新しい感じた。父の話によれば造船業で財をなした富田家は富田重造一代で築いたものだという。

恐らくこの家もその流れで作られたものだろう。まだ十年と経っていないような佇まいだ。

女中が来て永久子を案内する。中の作りもかなり豪華で家具も立派だ。

しかし永久子は何かを感じた。

おかしい

不気味だとか恐ろしいとかとは違う。どことなくこの家は冷たいのだ。

ふと周りを見渡すと「あれが天皇の…」と指差す女中達の何と表情の暗いことだろう。

永久子を案内する女中も沈んだ表情で前に進む。

（・・・この家は何か問題がありそうね）

永久子は心の中で呟いた。

そう永久子が思案していると女中は奥の広い部屋に永久子を通した。

「ここにございあす。どうぞ。」

通された部屋はただの客間にしては少々派手すぎるのではないかというくらい眩しい物ばかりが置いてある。

とにかく机一つにしても少々金箔の多すぎる感がある。
これは趣味が悪いなと永久子は思った。

その目が眩むような部屋の中に埋もれるようにしてある二人の男が
中央に座っている。

富田重造とその息子初五郎である。

「ようこそ我が家へ！」

重造が答えた。

恰幅の良い・・・という言葉だけでは足りないくらいの腹回りだ。
ぶくぶくと太った腕に持つ扇をハタハタと動かしている。

いくら季節のせいとはいえ喜一とは比べ物ならないくらいの汗をか
いている。

渋い紺色の生地で誂あつえた着物は今日のために用意した事がありあり
とわかる。

顔に脂汗をかき、重造はにかつと笑う。その前歯の半分は金歯だっ
た。

「遠く東京から来て頂いて感謝してますぞ。えらくお疲れになった
でさう。」

重造もまた慣れない標準語を使おうとしている。

だが、喜一よりもっと下手糞だ。いつそ方言のまま話せばよいのに、
と永久子は思った。

「さあさあ、そこにどうぞ！お嫁様！（およめさま）」

五十後半のうすら禿げた髪にギトギトとした油を塗り、無駄に蓄え
た髭を右手で盛んに引つ張りながら重造は扇を持った左手で永久子

の座るべき席を指した。

礼儀を知らずに金銭的にすすくと成長しただけあって、やはり成金には品が足りない」と永久子は不快に感じる。

それは重造の息子・・・永久子の夫となる初五郎にしても同じだった。

きつちりと髪を七三にわけ分厚いめがねをかけたその青年はピリピリとした空気でこちらを見ている。

かなりやつれていて食が細いのか何か病が潜んでいるのかわからないぐらいに頬はこけている。

そして目つき この目つきが不快だ。

一体何にそんなに不満を持っているのかわからないがずっとこちらに鋭い目つきを向けている。まるで睨んでいる様だ。

「・・・こんにちは」

初五郎は小さい声で挨拶をした。

薄い容姿に比べて声はしっかりとしていた。

しかし口調もまた不快だ。

「遠いところからようこそ。東京から来たのでは色々と慣れない事も多いでしょうし、こういう家柄のところに嫁ぐのは初めてでしょうから大変な事も多いと思います。がよろしく願います。」

永久子は完璧にこの男とは合わないと思った。

重造はまだハタハタと忙しそうに扇を動かしている。

自分がここに来たのは一族を保つ資金のためだ。

そして向こうが私をここへ招いたのは貴族の称号を欲しての事だ。

それはお互い十分承知だろう。

重造はその脂ぎった醜い顔で不釣合いにも皇族との繋がりを欲しが

っている。

しかし、重造はその目的の上でも永久子を自分の娘としてみようとしているし、案外人柄は良さそうだ。

その容姿と違い人的にはまともだと言える。

だが、初五郎の方はどうだろう。

今の挨拶。これは明らかに永久子の身の上を皮肉っている。

身分以外に勝てるものがないのは承知だ。そんな事は十分わかっている。

その事に初五郎は笑う。可笑しいのだ。

天皇との血の繋がりにあるにも関わらず生活は我々より低いとは何と面白いと思っているのがありありと見える。

この男が私を娶ったのはきつと見下したかったからに違いない。

そんな事を思いながら「よろしく願います。」と永久子は頭を下げた。

屈辱だった。

第三章 「夫」(後書き)

んー。コミカルとか入れたほうがいいのかな。。。
中々進みません

第四章 「新居」(前書き)

長崎での新しい生活が始まった永久子。

慣れない新居に戸惑いながらも親しい女中の梅に支えられ暮らしていたが・・・

第四章 「新居」

永久子の新しい生活が始まった。

今までの東京の父の別邸の暮らしとは違う。長崎の豪邸での生活だ。

田舎田舎と初めは馬鹿にしているところもあったが思ったよりも快適であった。

富田の家の女中は数えきれないぐらい雇われており永久子の身の回りを世話を任された女中達だけでも顔と名前を覚えるのに一苦労だった。

永久子は自分が用事がある時以外にも女中達の話聞き、誰がどんな名前で呼ばれているかしっかりと記憶していった。早くこの家に馴染まなくてはという思いからだった。

これは自分が自ら望んだ生活ではない。

だが、もう決まってしまった以上変えることはできない。

変える資格などない。これは三度目の結婚だ。恐らくこれが最後の結婚だろう。

ならば骨を埋める覚悟で望まなければならない。

どれほど耐えがたい環境になろうとも自分には意志がある。

その意志を捨てなければどんな過酷な状況となろうともきつと自分の周りも未来も良くなるはずだ。

改めて強く意志を心に刻んだ永久子は少し丸めた背中をすつと伸ばす。

さて…と思った瞬間目の前に浅く皺が刻まれた手がお茶を出してきた。梅だった。

「もうそろそろ夕飯ですけえ、お待ちくだしあ。」

「ありがとう。」

例を言つて永久子は一一口お茶を口に含む。

渋味のないまろやかな甘味が口いっぱいに広がる。なんと美味しいお茶なのだろう。

永久子にとってはこれだけでも女中達の作る夕飯に負けなくらい満足な味だ。

「本当にあなたの入れたお茶の美味しいこと。素晴らしいわ梅。」

「めっそうもなかでしあ。そんな事言つてくださつて嬉しあす。」

梅は耳まで真っ赤だ。突然永久子に誉められたのがかなり恥ずかしいらしく照れながら袖で口元を隠した。

袖に隠された口元がちらつと見えると梅の小さな八重歯が少しだけ顔を出す。

若い頃はさぞにこやかな笑顔の似合う可愛らしい少女だったに違いない。

梅は年こそそろそろ五十に届くかという見た目だったが静かに刻まれつつある皺の入ったその顔は適度に丸みをおび若い頃の面影をまだ十分に残していた。

「あなたは何でも出来るのね。お茶の煎れ方から何から私の周りの事でも何でも。」

梅はますます赤くなり答える。

「いえいえそがぁな事困りますけえ言わんさつてくだしあ。私はぬか床なんか作るのは得意ですが文字とかはからつきし読めないですから…」

梅は永久子の結婚のためにわざわざ富田家がよこした永久子専用の傍女中だ。

公家の娘の世話をさせるくらいの女中なのだからよほど自信を持って送り出したのだろう。

そしてその富田家の選択は間違ってはいなかった。

「文字なんていくらでも努力すれば出来るものよ。あなたのその才能は私にはないものだわ。大切になさいね。」

梅はまだ赤みをおびた顔で深々と手をついて頭を下げた。

しかし梅と過ごして一月が経とうとしているがまだわからない事は多い。

他の女中とはこの家の人間からの扱いが明らかに違う。

年からいってもこの家の事をよく知る人間に違いなからそのせいかもしれない。

しかし何か…何かが…

その時後ろでカタンツと音が鳴る。部屋に入ってきた初五郎だ。

「今しがた仕事が終わったんだが…お取り込み中でしたか？お義母様。」
かあ

梅の赤かった顔がさあっと血の気が引き一気に青ざめた。

「い…いえ、申し訳なあです。只今夕飯の支度しますけえお待ち

くだしあ。」

梅が慌てて立ち上がったので畳を擦る音がいつもより大きく聞こえた。

「ふん、あの女…どうせこの後親父の所に顔を出すんだろう。」

そう 蔑んで目で皮肉たっぷりに言い捨てた初五郎の目を永久子は見る。

まるで親の敵とでも言いたそうに梅が去っていった方向を憎らしげに睨んでいる。

永久子は理解した。
梅は…重造の妾だ。

第四章 「新居」(後書き)

更新は波があります。が週1くらいでやっつけていこうかと。。。
初五郎のキャラ設定に苦労してますorz

第五章 「苦痛」(前書き)

富田家と梅の関係を知ってしまった永久子。
夕食で起こったある出来事で初五郎は

第五章 「苦痛」

新鮮な金目の煮付けが運ばれてきた。

こおばしく炊けた米と一緒に永久子は柔らかに煮た金目の身をほぐし口に運ぶ。

そしてふと前を向く。

向かい側に座るのは先程の件で機嫌を悪くしたのかずっと眉をしかめている初五郎だ。

今何か話しても何も良い返事は返って来そうにない。

永久子はゆっくりと味噌汁の椀を手で持つ。

しかしさっきの二人：初五郎と梅の関係だ。

あの時確かに初五郎は梅を射殺さんばかりに睨みつけそれに対し明らかに梅は恐れていた。恐れているというよりは怯えや…わずかに申し訳無い口調だったのも気にかかる。

多分あの二人の関係はこうだろう。

重造は正妻との間に子を成した。それが初五郎だ。

しかし、重造は正妻の他に梅を妾にして置いておいた。

もちろんその事を正妻や初五郎が快く思わない。

正妻は五年前に肺をやられて他界したと聞いている。

残された初五郎が梅を目の敵にしても無理のないことだ。

永久子はやうつ向いて溜め息を漏らす。

人間とは救えぬ生き物だ

自分は妾の子である。その自分は過去の結婚により夫が妾を選ぶという屈辱を経験している。

そして今自分の夫は母の恨みである妾を敵視している。

何の因果であろうか？

自分と初五郎は似ているのかもしれない。

一人の男に抱かれた二人の女。

しかし、初五郎は正妻の子で自分は妾の子だ。

妾と共に暮らす父親の元に住む初五郎にとって、永久子の生い立ち
は気に入らないものだろう。

その証拠に、妻として迎えた永久子を初五郎は少々軽蔑している節
がある。

永久子は更に深く、だが聞こえぬように溜め息をつく。

自分もその愚かな生き物の一人じゃないか。

こんな薄暗い霧のような晴れる事のない問題の渦中に置かれても、
今回は自分ではなく初五郎や重造達の事だ。

自分の身に降りかからなかっただけで以前とは全く違う安堵感を覚
えている。

他人事のように考える自分が何とも愚かであるなと永久子は自分を
責める。

しかし、もし初五郎が女を囲ったとしても自分は何も感じないだろ
うなと永久子は思った。

それ位永久子は初五郎に対して愛情を持てなかったし興味を示すこ
とが出来なかった。

永久子は胡瓜の糠漬けに箸を伸ばす。

その時だ。

「何やってるんだ！！」

初五郎が怒鳴った。

女中が膳に運ぼうとした熱燗を初五郎の膝にこぼしたのだ。

「もっ申し訳ありあせん…っ」

女中は太層脅えている。ここから見ても体の震えが分かるほどだ。途端に初五郎は立ち上がり女中の顔を思いつ切り叩いた。

バシッと言う音が部屋に鳴り響く。

永久子はびっくりして飛び上がった。

初五郎の平手打ちは続く。瞬く間に女中の顔は腫れていき、やめてくれと懇願して泣き始めた。

恐ろしい光景だ。

「あなた…っおやめください…っ」

永久子はとつさに声を出した。

「もうよろしいじゃないですか。それより濡れた着物を早くお脱ぎになって下さい。火傷なさってるかもしれませんわ。」

永久子の胸が発作のように脈を打つ。

「…何だと？」

息を荒げて初五郎が聞き返した。

「あなた、私はあなたのために…」

永久子が反論しようとした瞬間だ。

永久子は何が起きたのか分からなかった。

ただ顔に痛みが走り自分の軽い体が宙に舞い上がるように強い力で跳ね飛ばされたような感覚を全身に受けた事だけは間違いない。

永久子は殴られたのだ。

自分の夫であるはずの人間が懇親の力をこめて与えた痛み。
永久子はしばらく状況が理解できず、ただみるみる内に赤くなる頬に手を当てる。

「あなた……」

夫の顔を見る。

今までに見たことのない顔だ。

不快感を露にし顔を真っ赤にさせている。

眉と目はつり上がり口は今にも罵倒の声を吐き出しそんな形をしている。

「……うるさいっ」

初五郎は叫んだ。

こんな大きな声ではきつと家中に響きわたってるに違いない。

「妻の分際で夫にそんな口を聞く奴がいるか　！！二度と俺にそんな口を聞くな、わかったな！？」

永久子の体に震えが走る。何と恐ろしい夫だろう。

こんなつまらない事に腹を立て手を出すなどこれからどうなってしまうのだ。

いつ弾みで殺されてもおかしくはないではないか

永久子はこの家に嫁いで心底後悔した。そしてどこか冷静な自分が

いるのに気付く。

「ああ、また私は幸せになれないのか」

当然だ。こんな心の中が幾重にも捻れている女がまともな幸せを味わえるはずないのだ。

悲しみや痛みと共に永久子の気の強い性格の中から怒りと言つものが込みあげてきた。

ああ、夫よ

私の夫よ

私は決してこの事を忘れはしない。

あなたを憎むことを忘れはしない。

あなたが地獄で泣き叫び血の涙に濡れながら阿鼻叫喚を唱えようと私も私はただひたすらに笑い嘲るだろう。

その日のために私はここにしよう。

このくだらなく魅力的な理由のために私はここで暮らして見せるわ。

永久子は苦しそくに蹲る。

しかしその目は強い光を放っていた。

それが初五郎には涙に見えただろうか？それとも復讐の炎に見えただろうか…

第五章 「苦痛」 (後書き)

DVでました。。。

毎回サブタイトルに苦勞してますorz

第六章 「櫛」(前書き)

初五郎から暴力を受けた永久子はますますこの家に対する不満を抱いていく -

自分の髪を梳きながら昔の思い出に耽る永久子の部屋に梅が -

第六章 「櫛」

朝方まだ蒸し暑さが迫ってこない内に永久子は髪を梳き始める。

黒々と艶めく永久子の漆黒の髪はどんな着物にも良く合う。この豊かな黒髪は永久子の自慢とするものの一つだ。永久子はその髪を上質な細工がこらしてある柘植^{つげ}の櫛で丁寧に梳いていく。

嫁入りの時に持ってきたこの櫛は永久子が女学生の時から使っているものだ。

伯母が入学する記念にと特別に誂えてくれたもので、もう当に十年は越えているというのに色は一向に色褪せずより渋味を増していく。

「永久子ちゃんは本当に美人ね。将来が楽しみだわ。」

会う度に嬉しそうにそう永久子に話しかけるのが伯母の口癖だ。それは永久子が大人になった今も変わらない。

父の妹にあたる人だが、寡黙で厳格な父とは違い屈託なく笑う優しい伯母で、若くして夫をなくし子をなさなかったためか姪の永久子を特に可愛がった。

伯母はいつも日に当たるとやや栗色に光る髪を綺麗に結い上げ、贅沢のできない家の中でも鮮やかな紅色の着物を身に纏い凛とした美しさを放っていた。

永久子が嫁に行く時も心配そうに色々世話をしてくれて複雑な環境に置かれる事の多かった永久子にとって心の支えとなってくれた人だった。

しかし、遠方長崎まで嫁いだ永久子はもう毎日のように伯母に会う事はできない。

これからはこの櫛や永久子の実家から持ってきた思い出の品が頼りだ。

永久子が暮らす十五畳程の広めの和室には永久子のためにと用意された家具の他に東京から持ってきた馴染みの化粧道具や思い出の詰まった品が入った鞆が所狭しと幾つもの転がっている。

永久子はこの鞆や箱から毎日少しずつ物を取り出しては懐かしさにふけるのが日課だ。

寂しくなった時や辛い時にそういったものに触れると心が癒されるのだ。

しかし、最近の永久子はいつものようにそういったものに触れるだけでは気分が晴れなくなっていた。

原因はあの男だと永久子は顔をしかめる。

永久子に手をあげてから初五郎は徐々に本性を表すようになっていった。

痩せやつれた顔で眼鏡の奥から睨むように視線を伸ばす不快な目つき。

見た目と同じく初五郎はかなり神経質で元々精神の方も少し患っているらしくそれとあいまってかなり達の悪い暴れ方をした。

とにかく何か少しでも気に入らないことがあれば女中達に当たり散らし、ところ構わず叫び出す。

永久子は初めにこの家に来た時何故あんなに女中達が暗い顔をしているのかようやく理解した。

「皆初五郎を恐れているのだ。」

それだけが理由かどうかは定かではないがそれが一つの原因であることにまず間違いはない。

これは中々厄介な問題だな、と永久子は思った。

梅には重造の事もあるし手が出せない。だから初五郎はその鬱憤を代わりの女中達で晴らしているように見える。

しかし、今更梅をやめさせても初五郎の癩癧は治るものではないだろう。あれは生まれ持った性格も大いに関係しているに違いない。そしてその性格は夜の情事にも深く関係していた。

永久子は生娘ではないし、今更濡事を恥じらうような年ではなかったが今まで自分を組み敷いたどの男より初五郎の女の扱い方は嫌悪を抱くものだった。

夜明けりの乏しい床の間で永久子の上に乗る初五郎は最悪な野獣だった。

女をただひたすら自分の快樂の道具として扱い見下す事が初五郎の情事の目的であり、永久子のような位の高い女でさえ自分の言いなりなのだ。初五郎は得意気な顔をして永久子を玩具おもちゃのように玩んだ。快感も昇天も与えられない情事が永久子には苦痛だった。

体の相性もあわないようではもはやこの男についていく意味も見い出せない

永久子の中にますます初五郎を嫌悪する気持が広がる。

それを知ってか知らずか日々初五郎は永久子に対する苛立ちを表に出すようになってきた。

「お前の一族はさぞすごいお方達の集まりなんだろうなあ、これだけの家を落ちぶれさせたんだからなあ。」

毎晩酒に酔い、顔を真っ赤にして綺麗に分けられた七三の髪の毛の方へと崩しながらおかしな訛りで初五郎は永久子を責めた。

毎朝夕飯に愚痴をこぼしだす初五郎の声を永久子は聞こえない振りをしてじつと我慢する。

永久子はそんなに大人しい女ではない。寧ろ違うと思った意見にはすぐさま的確に反論し、自分が正しいと思った事は絶対に譲らない性格だ。

だが、そんな強気な性格も今は身を潜めるしかない。こういう愚かな男の前で正義を通して逆上されるだけだと分かっているからだ。

永久子はふと鏡の方を向く。

真っ直ぐにすかれた長い髪を左手にもち右手には櫛を力なく握っている。

視界を遮るように生える長い睫の根元を見ると、うつすらとくまのようなものがある事に気付く。

今はそうでもないが、いづれこの影は永久子の透き通りそうなくらい白い肌のせいにより目立ってくるに違いない。

このシミ一つない肌もピンと張り美しい輪郭を表す首元もやがてはくすみ弛んでくるのだろうか…？

もし、こんな苛立ちの募る生活が続いたら自分は倍の速さで年をとってしまう…

いいや、そんなはずがないと不安を掻き消すように永久子はそのふつくらとした形の良い唇に紅を塗る。

こんな暗い気持ちではいけない。外にでも出掛けて憂さを晴らそうかと思つた瞬間襖の向こうから小さい声が聞こえた。

「…永久子さん、ちいとお話があるんですが…」

梅
だ
っ
た

第六章 「櫛」(後書き)

バタバタしてて更新が遅くなりました(汗)

ケロンパさんコメントありがとうございます
アドバイス通り勉強しようと思います。

第七章 「告白」(前書き)

永久子に話があると言つ梅。

その口から出た真実に永久子は――

第七章 「告白」

永久子は答えた。

「何かしら…どうぞ。お入りなさい。」

「申し訳ありません。せつかくのお時間無駄にして…」

梅は音を立てないように注意深く襖を閉め、こちらに手を着いて深く腰を曲げる。

今しがた朝げの片付けが終わったばかりだからだろう。渋い山吹色の着物の上に着けている前掛けに水が撥ねている。

「永久子さんにお話したい事があるんです。」

梅の顔は真剣だ。

白髪が少し入り混じり灰色がかった髪の毛をきつく後ろに結い、かなり年期の入った濃い茶色の簪で留めている。

永久子の櫛の様な思い入れが梅の簪にもあるのだろうか？

浅く皺の刻まれた、だが働く手にしてはややか細い梅の白い手が永久子の前に行儀良く揃えられる。

梅はまた深く頭を下げた。

一体どんな重要な事を話そうとしてるのだろうか…

「…話してごらんなさい。」

梅がゆつくりと口を開き発した言葉は永久子が予測していたもののものだった。

梅は、自分が重造の妾である事。それは初五郎の母が重造の正妻になる前からそうであった事。そしてその関係は今も続いている事をおえつ嗚咽を漏らしながら語った。

「申し訳ありません…っ。本当に申し訳ありません、全てあたしのせいです。この家がこうなったのも全部全部あたしのせいなんです…」

梅の目から大粒の涙がボロボロとこぼれ、梅はそれを畳に溢さぬように着物で拭う。

申し訳ない申し訳ないと梅は永久子に何度も頭を下げる。

「重様しげさまは私を拾うてくらさった優しい方なんです。私は小ちい（ちいちい）頃に親二人をなくしましてすぐ京に売られて踊り子やらされてました。でも十五の時重様がお客で来てくらさって私を拾うてくらさったんです。それからは大変良くしていただきやした。住む家も食べる物も、今はこんな素敵な方をお世話させて頂けるようになって。」

永久子はやや照れ気味に首を横に振った。

しかし、あの食い過ぎた狸の様な重造を梅がこれほどまでに慕っているとは意外だった。

てつきり梅の方が無理強いさせられてると思っていたからだ。

永久子の読みはだいたい当たっていたが、その一つだけは外れていた。

しかし、それなら梅についてのいくらかの疑問は解消できる。

初老の年であるというのに少女の様な面影を残し、恋する乙女のような笑顔を見せるのは未だ梅が重造を慕い続けているからだだったのだ。梅は他の同い年の女中達と違い、どんな日でも薄く化粧をする事を

欠かさない。

働いてる時の手を見てもぼろぼろと節くれだつても良いぐらいきつい仕事ばかりのはずなのに、白く良く手入れされている。

これら全ては重造のために梅が常日頃自分を磨いた証なのだ。

「あたしが二十歳の時奥様がいらつさつて重様の元に嫁ぎました。それから二年して初五郎様がお産まれになつて…」

永久子は妾に色々な感情を抱いている。

それは、前の夫が妾を持っていた怒りもあり、その自分が妾から産まれたという皮肉も持ち合わせているからだ。だが、梅に嫌悪を抱く事はないだろう。今も、この先も。

何故ならば梅と重造は立場上不貞にとられる関係だが、この二人は正妻が来るずっと前から愛し合っていたのだ。少なくとも梅の方は。しかし、正妻をめとった重造は初五郎と言う子供を成した。梅は何度も別れを告げようとしたが重造はそれを許さなかったと言う。

自分に対して少しでも情が残っている内は自分の側にいてほしいと頼まれ梅はここに残った。

「でもそのせいで彰子^{あきこ}さんは大変ご立腹なさらつした。初五郎様もあの様に病んでしまつて…あたしのせいで彰子さんは肺を患つたのだと今でも思うとりやす。重様は違つと仰つてくりやしたがあたしのせいです。初五郎様が永久子さんに辛く当たられるのもあたしのせいなんです。永久子さんの生まれはあたしと関係なゝに…それが申し訳なくて仕方なゝです。」

永久子はこの時初めて初五郎の母の名を知った。

話を続ける梅の顔はすっかり涙で濡れて鼻の頭は真っ赤だ。

永久子は少し羨ましく思った。

梅は恋に生きる女だ。一人の男を愛し、その男に愛されている。それが一つの家庭を壊し、永久子の夫婦生活に影を指す原因となっているとしても愛する想いを止めることができないのだ。

私は梅のように一人の男をこんなにも長い間愛し続ける事が出来るだろうか？

「話してくれてありがとう梅。辛かったでしょう？でもあなたのしている事は決して間違いなんかじゃないわ。とても素敵な事なの。ね、そうでしょう？だから、これから一人で溜め込んで駄目。私に話して頂戴。私も辛くなったらきつとあなたに話すわ。約束よ。」

永久子は梅の手を握りそう答えた。それは本心だった。

どの道自分に夫を愛する気持ちなど今も、そしてこれからもないのだから自分が夫に何をされようと関係ない。それよりこの痛ましくも美しい恋を守る方が永久子には素晴らしい事に思えた。

梅の目から止め処なく涙が溢れ出す。一生懸命声を殺しながらしゃくりあげる梅の肩を永久子はそっと抱き寄せ優しく背中を撫でてやった。

恋とはこれほどまでに辛く、狂おしいものなのか

その狂おしさに触れてみたいと言う熱が自分の中に生まれた事に永久子はまだ気付かない。

第七章 「告白」(後書き)

いつも電車の中で携帯から書いてるんですが、携帯だと難しい漢字が出てこないのもパソコンで編集して投稿しています。完全に二度手間です(=.=;)

第八章 「雨垂れ」(前書き)

雨が降る中読書をしようとする永久子
色々な物事を考えてる内に詩を詠もうと梅を呼ぶが・・・

第八章 「雨垂れ」

もう梅雨も終りだと言うのに雨が降る。

空気に混ざる埃を濡れ落とすように勢い良く地面に落ちてくる雨
湿気もなく眺めるだけなら雨も中々良いものだ。

この空から降る一滴ひとしずくが生命を潤し星を浄化する。

永久子は鞆に入れて持ってきた自分の本から何冊かお気に入りを選び、どれを読もうか迷っていた。そこにこの雨だ。

幸い出掛ける用事もなく家にいたが、この降りようでは外に遣いだされた者はひとまりもないだろう。

本を読むのは明日にしていつそ今日は一日この雨で詩でも詠もうか、などと考える。

今家に初五郎はいない。

三日前から重造とともに遠く東京に出ている。重造は自分の会社を
行く行くは初五郎に継がせたいらしい。

一人息子なのだから当然なのだが、永久子は初五郎にこの会社を継
がせるのに不安を抱いていた。

初五郎は馬鹿ではない。性格に大きな問題こそあれど、頭もそこそ
こ切れるし父の下で働く分には何も問題はないだろう。

だが重造は別格だ。普段大口を開けて品とは何かという様子で笑い、
食事すれば必ず一度は食べ物を畳にこぼす。それをいつも甲斐甲斐
しく世話するのは梅の仕事だ。

仕草だけならまるで赤子のように世話の焼ける重造だが、頭の方は重たそうな体とは反対に非常に良く動く。

さすが、一人で「富田造船所」を築いただけの事はある男だ。経営こそが彼の天賦の才なのである。

富田造船所と言えば今や破竹の勢いで伸び続け、市場占有率を半分越えるかどうかの大企業だ。

そこまで重造一人で伸ばしてきたものを初五郎は維持できるだろうか。

よほど努力がない限り無理である。永久子の将来に少しばかりの影が広がる。

いくら永久子が先を案じてもどうとなる問題ではないのだが：

公家の身分を持ち次期社長の妻という立場の永久子自身に課せられた仕事は今は何は特にない。

嫁いであら幾度か初五郎の妻として会合や宴会に呼ばれた事はあったが、それもそつなくこなしてみせた。

元々生まれが生まれであるし、幼い頃から叔母に連れられ色々と挨拶回りをさせられたおかげで永久子は大勢の注目を浴び、その中でいかに失礼のないように、恥をかかないように自分を美しく相手に印象づけるかを心得ていた。

長崎で初めて開かれた宴の席で若葉模様彩る鮮やかな深緑色に、金銀の刺繍を重ねた立派な着物を永久子は見事着こなして見せた。

永久子が呼ばれて振り向く度に誰から見られても恥ずかしくないようにと梅が懸命に結い上げた髪に挿した大きな琥珀玉のついた簪がしやりしやりと音を奏でる。

その音に続くように永久子の涼しくも美しい瞳が流れる。

一度も都会の土を踏むことなく人生を終えるであろう新しく親戚となった者達はその姿に魅了されその瞳に囚われる。

人々は口々に永久子を誉めそやし永久子の下に集まる。

もしかしたら永久子の人を惹き付ける不思議な魅力こそが本当の天賦の才と言ふものなのかもしれない。

永久子は読もうと思っていた本を全て机に置き立ち上がる。

雨は一段と激しく降り始めた。雨樋から流れ落ちる水の音が滝のようだ。

詩を詠もう

もう少ししたらきつと雨は更に酷くなるだろう。そうすれば風情は雨垂れの音に掻き消され何処かへ消えてしまふ。

その前に詠まなければ

永久子の趣味は非常に文学的だ。

日焼けも気にせず走り回りお転婆過ぎるとたしなめられる友も何人かいたが、永久子はその中に混じることができなかった。

体が弱いわけではなかったが日焼けをするとすぐに肌が赤くなりひりひりと痛むのであまり長い間外に出る事ができない体質だった。

小さい頃父や叔母が止めるのも聞かずに外で遊びまわった日は必ず体が火照って熱を出していた。それが永久子の透き通る程に白い肌の秘密だ。

あまり運動する事のなかった永久子の趣味が読書だ。

本は何処にでも連れていってくれる。

日の当たる太陽の下で思いつきはしゃぎまわるのも、何処か素敵な異国の国に行くのも、蜜よりも甘い恋をするのも本の中では自由

だ。

そうして得た感動や知識を永久子は時に周りの情景と共に詩に認したためる。

それこそが永久子の遊びだ。

硯はある。墨も筆も…だが紙がない。梅に持ってきてもらおう。そう思い梅を呼んだ。

「梅、お願いがあるの。ちょっと来て頂戴。」

すぐに襖が開いた。

そこにいたのは梅ではなかった。

もつともつと…永久子よりも若い女中だ。

まだ二十歳になったかどうか。そんなものだろう。

くりくりとした大きい目がこちらを見てぱちと瞬きをする。

まるで可愛い子りすの様だ。

新しく入ったばかりなのか朱色の着物はまだ新しい色を放っている。濃茶の髪は細くすると上に結い上げられきつく抑えられつやつやと輝く。

「御用でしょうか、奥様。」

その女中はあどけない笑顔で返事をした。

第八章 「雨垂れ」(後書き)

新キャラ投入です。

ぶっちゃけ名前が決まってません(爆)

第九章 「瑠璃」(前書き)

詩を詠むため梅を呼んだ永久子。
だが、そこに来たのは

第九章 「瑠璃」

永久子は少し驚いた。てつきり梅が来ると思っていたのに、見た事のない女中がこちらに向かつてにこにこと笑いかけている。

「新しくこちらに勤める事になりました。瑠璃と言います。よろしくお願い致します。」

綺麗な言葉だ。この地方の生まれではない。

久々の標準語に永久子はやや安堵し、だが少し気が引き締まる。

「そうなの。よろしくね瑠璃。じゃあ貴方をお願いしようかしら。^{わたくし}私詩を詠みたいの。でも墨を垂らす紙がないから持ってきて欲しいのよ。」

永久子は瑠璃がどういふ人間なのかを見定めようと鋭く瞳を向ける。瑠璃はくりくりとした大きな目で真っ直ぐにこちらを見てにっこりと笑う。

途端に目尻が垂れて少女の様な顔になる。

「わかりました、奥様。只今お持ち致します。」

そう言うのと瑠璃は素早く立ち上がり鼠のようにちよろちよとした可愛らしい動きで部屋を出ていった。

どこから来たのだろう。ここの生まれの顔立ちでもないし、言葉からすると育ちも東京の方だ。

わざわざ東京からこんな場所に来るのは永久子一人だけだと思っていたのに。

永久子は滅多に人に心を開かない。

元々疑り深い性格で、人に騙されたり利用される事を人一倍嫌う性分だ。

良く人を観察し、どのような性格でどんな癖を持ち、それが自分と合うものなのかを見定める。

こうまでしなければ、人を信じる事の出来ない自分が時に哀れだとも思う。

だが、過去の経験を思い出せばこの性分を永久子はなくすことが出来ない。

男に・・・そして女にまた騙されるくらいなら少々息苦しくても我慢しようと永久子は思っているのだ。

そしてこの永久子の厳しい試験に受かったのは幼き頃から慕う叔母と、ありのままを曝け出し自分を慕ってくれる梅しかいない。

果たして今の娘は私の目通りに叶うだろうか…？

そう考えているうちにまた襖が開いた。

「お持ち致しました、奥様。これで良いでしょうか？」

瑠璃は急いで持ってきたのか少し息をきらしている。

「有難う、瑠璃。」

永久子は上品に微笑む。

その顔は雨が降って薄曇った空気を掻き消すかのように輝く。

瑠璃が可愛らしいと言っても永久子の美しさは別格だ。

可憐な花を咲かす牡丹よりも、優美に頭を垂らす百合よりも微笑む永久子の姿は美しい。

それに魅せられた瑠璃は恍惚とした表情で永久子を見る。

「どうしたの？瑠璃。」

永久子が話しかけた瞬間瑠璃は目を冷ましたかのようにはっと声を
出して飛び上がった。

「いついえ、奥様があまりに美しいので…」

「あら、有難う。」

永久子が感謝した途端瑠璃の顔がみるみる赤く熱を帯びていく。
永久子はどことなく梅に似ているな、と思った。真っ赤になった瑠
璃に永久子が問う。

「あなたの言葉…ここの言葉ではないわね。どこから来たの？」

「先日東京から来ました。父も母も東京にいます。」

「東京からこんな所へ？」

「はい、両親は東京ですが、親戚が長崎なんです。向こうの学校に
行くつもりはなかったのだからこちらに来ました。」

「そうなの…」

ますます変わった娘だと永久子は思った。

両親は東京にいるのだし、永久子の様に強いられて来た様子もない。
年端もいかぬ娘が一体何故こんな辺鄙な所に好き好んで来たと言っ
たのか。

まあいい、その内わかるだろうと永久子は足を崩した。

「話してくれて有難う。仕事の邪魔になってしまったわね。」

「いいえ、こちらこそ相手して頂いて…それでは仕事に戻ります。」

瑠璃が出ていき永久子はふと外を見る。

雨が降る

ぬかるんだ地面に雨は大きな水溜まりを作り、その大きさを増していく。

「雨降らん 我が心に 瑠璃色の 雨音弾む 梅雨の溜まりて」

永久子が筆を取り認めた詩は確かに永久子の心に瑠璃と言う少女が刻まれた事を意味していた。

第九章 「瑠璃」 (後書き)

遅くなりました；

只今作者テストに終われてて執筆困難な状態に（汗）
次もまたちよつと遅れるかもしれません。。。

第十章 「親戚」(前書き)

雨の中詩を詠む永久子。

梅に瑠璃の事について聞くが・・・

第十章 「親戚」

雨の音で目を覚ます。先程まで熱心に詩を詠んでいた永久子は一息ついたまま少し眠ってしまっただけらしい。

遠くから味噌汁や煮物の薫りが漂ってくる。もうそろそろ夕食ゆいけだろうか…

雨の湿気のせいで気だるい空気が部屋に流れ、永久子はまだうつらうつらと目が覚めない。

そこに梅の声がした。

「永久子さん、夕飯支度整いましたけども…」

「…有難う、梅。」

寝惚けた声を出すと、梅がすぐに襖を開けた。

「お加減どうなさえました？具合でも悪いんでは…」

心配そうな顔で梅が傍に来る。

「何でもないわ。少し眠っただけなの。」

「ほんつに大丈夫ですか？何かお薬お持ち致した方が…」

梅は本当に私を大事に思っているのだな、と永久子はくすりと薄く笑った。

「気にしないで頂戴。本当に眠っていたただけだから。それよりお腹が空いたわ。おいしいご飯でも頂こうかしら。」

その顔を見て梅は安心したように安堵の笑みを浮かべる。

「すぐ用意しますけえ、お待ちくだしあね。」

そういつてちよこちよこ部屋を出ていく梅の姿はやはり瑠璃に似ていた。

初五郎のいない部屋での食事に永久子はふうと安堵の息が漏れる。

こんなにゆつくり夕飯に箸を動かすのは久しぶりだ。

初五郎は永久子のする事全てが気に入らないとでも言うように色々難癖をつけてくるので心休まる時などあったものではない。

「お茶のおかわり用意しますけえ。」

梅が隣でせつせと働いている。

初五郎の件を我慢すれば、この生活も中々かもしれない。

雨の湿気のせいか梅の首にうつすらと汗が見える。

そのうなじをみて永久子はふとある事を思い出した。瑠璃の事だ。

「…ねえ、梅。」

「はい、何でしょ？」

くるりと振り返った姿が更にあのくりくりした目の少女・瑠璃にそっくりだ。

「今日用事があつてあなたを呼んだのよ。そしたら、新しく来た瑠璃と言う子が来てね。大きな目の綺麗な髪の子よ。その子がことなくあなたに似てたの。仕草なんか特にだったわ。」

「ああ、瑠璃ですか。」

梅はにっこり笑った。

「あの子は一昨日からこちらに勤める事になりました。私の姪なんですよ。姉の娘でとにかく器量が良くて。向こうで良い学校出たつちいのにどこにも嫁に行きたくねえとただこねまして。東京なんかより田舎が良いというんでしょうがねえとこちらに勤めさせる事にしたんです。ほんつに変わった子ですよ。」

二人は親戚だったのか それならばどこか似ている顔立ちや仕草にも合点がいく。

「私が重様に話したらこつち来させたらどうかといってくださいっただんです。」

梅の顔はすごく幸せそうだ。

本当に重造を慕っているのが分かる。

「あなたは本当にお義父様の事を好きなのね。」

梅が顔を真っ赤にする。

「はっ・・・はあ、とんでもござあ・・・い、いえ。確かにお願いしておりやう。で、ですが、そのお・・・」

取り乱した梅はわけの分らない言い訳を並べている。

素直にはいと言えない初々しさに永久子は梅を自分より年が下の娘にしか思えない。

そんな梅の様子が永久子は可笑しくて堪らない。

「梅ったら耳まで真っ赤だわ。そんなに慌てなくても良いのに。」

「はあ、すいません・・・」

梅はまだ恥ずかしそうだ。

こんなにもうきうきとした恋の一面を見せる梅を可愛らしいと見る自分と少し羨ましいと思う自分がいる事に永久子はふと気付く。永久子は少し動揺した。瞳に僅かに暗い色が広がる。

（もう自分には必要のない感情なのだ。この感情によってどれだけ自分が傷つけられたことか・・・）

永久子はその思いを振り払った。今の自分にとっては煩わしい感情だ。

恋など・・・愛など、今の私には無縁であり必要のない感情なのだ。恋は女を輝かせる素晴らしいものだ、愛は人を豊かにさせる尊いものだ。と心の中では分かっている。だが、今の自分にそのような単純であり、だが扱いの難しい感情を支配できる力があるようには思えない。恐いのだ・・・恐れている。愛を。恋を。

まして、初五郎相手にそんな感情を出せという方が難しい。

永久子は何事もなかったかのように、明るく振舞う。

「そうなの。だからかしら？あなた達二人と言ったら本当にそっくりなのよ？何が似てると言ったら分からないけど・・・そうね、やつぱり目と仕草だね。他の女中にも聞いて御覧なさい。きっとそう言うわ。」

「はあ、実はもう何人かに言われてまして。そんなに似てるでしょうか？」

「ええ。あの娘を見てすぐにあなたが思い浮かんだもの。」

永久子はふふつと笑った。

部屋からは珍しく永久子の笑いが漏れている。
永久子にとって久しぶりの楽しい食事だった。

だが、永久子の笑いの後ろに影が近づいている

明日には初五郎が帰ってくるのだ。

第十章 「親戚」(後書き)

ようやく十章です。

中々話の進まない所です・・・

第十一章 「帰宅」(前書き)

とうとう初五郎が家に帰る日となった。

重造に会えるのを心待ちにしている梅と違い、永久子は初五郎に会うのが嫌で仕方がない。

仕方なく玄関に迎えに出るが・・・

第十一章 「帰宅」

永久子は渋く色の入った橙色の帯に手をやり、きつく締め直す。帯の色に合わせて淡い黄色の着物もしっかりと皺を伸ばし鏡の方を振り返る。

鮮やかな温色でまとめた永久子はぱつと華やかに見える。

きつちり結った髪も崩れてはいない。

この格好ならどこに行っても恥をかかず、誉めそやされるはずだ。だが、永久子の顔は暗い。

今日は久し振りに天気も良くなったというのに永久子の白い顔には影が見える。

永久子は鏡の中の自分と目が合った。

鏡の中に映る自分は何という顔をしているのだろうか
まるでこれから冥土に行くような表情だ

永久子の憂鬱の原因はもうじき訪れる初五郎だった。

東京での仕事を追え、昼までには重造と一緒に帰ってくることに
なっている。

今か今かとそわそわ落ち着きのない梅と違い、永久子は嫌で仕方が
ない。

「またあの男に会うのか・・・」

永久子はぼそりとつぶやく。

この数日の間、永久子は幸せだった。

夕時にどやされることもなければ、嫌味をつらつらと垂らされる事
もない。

気分によって叩かれたり、あの鋭く嫌味な目つきで睨まれる事もな

い。

ああ、何故後もう少しそのままの生活でいさせてくれなかったのだろつ。

誰を恨むでもないが、恨めしい。

永久子はふうと息をつき、また息を大きく吸い込む。
背筋をしゃんと伸ばし、襖を開けた。

すぐそこには梅が立っている。

早く迎えに出たくて溜まらないという表情が全面にでていて永久子はくすりと笑う。

「先に玄関に行っていて良かったのに。早くお出迎えの準備して頂戴。」

「は・・・はあ、でも永久子さんが・・・」

「私の事はいいから。さ、早く。」

「はい、では失礼・・・」

最後まで言い終わるかどうかの内に梅はばたたと行ってしまった。永久子にとっては憂鬱でたまらない出迎えも、梅にとっては待ちに待った恋人に再会できる日なのだ。

それに比べて自分はどうかだろう。

夫に会うというのにこの顔だ。

しかし、そんな事を言っている暇はない。
初五郎が帰ってくる。

もし機嫌が悪ければ、梅が自分にあたるだろう。
だが、梅は重造を心待ちにしていたのだ。
そんな梅が初五郎に手をあげられるのは可哀想だ。
今日は代わりに自分が初五郎の相手をしなければ。

足が急に重くなった様に感じる。
だが行かねばならない。

何事もなかった様に玄関に出ると、そこには汗だくになった重造が
帰ってきていた。

「いやあゝ、蒸す蒸す！！たまらん！！
こっちゃん雨が降ったんか？空気が湿っちやる！！」

今すぐにでも着物を脱ぎたいと喚く重造を梅は嬉しそうに迎える。

「ようお帰りなさいました。お疲れでそう。
お湯沸かしておりますけえ。それとも何かお食べになりますか？」

「うん、風呂だ風呂。風呂と飯だ。どっちもだ。」

「はい、今すぐ用意しますけえ。」

重造はにこにこしながら梅に鞆を預ける。

「よう守ってくれたな梅。お前がこの家にいると安心して仕事ができるなあ。」

「有難うございますあ。」

ああ、と永久子は息を漏らした。
何と幸せそうな二人だろう。

お互い慕い合っているところも柔らかい空気が流れるのか。
自分にはこんな相手がいただろうか・・・
わからない。忘れてしまった。
いいや・・・いなかったかもしれない。

「・・・お帰りなさいませ。お義父様。」

「おお！永久子さんか！！相変わらず美しいのう。
初五郎はもうすぐ着くぞ。」

「そうですか。」

初五郎はまだ着いてなかったのか。
だが、もうすぐ帰ってくるのかと思うと、また気分が悪くなる。

「顔色が悪いぞ永久子さん。どうかしたんかねえ？」

「・・・いいえ、何もありませんわお義父様。
それよりせっかく我が家に帰って来たんですからどうぞゆっくりな
さってください。」

「そうさせてもおつかね。今日はいやに疲れたからこのままぐっす
りだろう。」

「そうですね。私はこのまま初五郎さんを待ちますから。どうぞこ
ゆつくり。」

永久子にはっこり作り笑いをする。

この顔をすれば大抵の人間はころつと騙されてたちまち上機嫌になる。

「おう、すぐ来るから待つちよつてくれ。もう少しじゃ。」

そう言うと重造は汗だくでふうふうと息切れしながら梅の後についていった。

重造を目で見送ると、永久子はふいと玄関の方を向く。

本当だったら自分も部屋に戻りたいぐらいだが、そうはいかない。今日は初五郎の機嫌を取らなければならないのだから。梅の為に。視線を落としながらそんな事を考えているとじやりつと砂をにじる音がした。

「ああ、待っていたのか。これは意外だったな。」

そこには、重造とは逆に涼しそうに立つ初五郎がいた。

同じ道を通ってきたとは思えないぐらい汗一つかいていない。

いつも通りに視線を見下すようにこちらに向け、やややつれたようにこけた頬は、めつたに上がらない口角と繋がっている。

着物で帰ってきた重造と違い初五郎は深い紺色のスーツを着ていた。ただでさえ細い初五郎の身体がますます細く見える。

「どつという風の吹き回しか知らないが・・・鞆でも持ってもらおうか。」

数日振りに会った妻にこんな事を言うのだからこの男もまた相当自分に興味がないのだな、と永久子は実感する。

暫く初五郎についてわかった事だが、初五郎は永久子のような女を大層嫌いなようだった。

初五郎は人を見下す事を好む。まして女など、どんな優れた才を持

つていようと自分の上に立つなど許さないと云った扱いだ。

だが、永久子はそれをはいいいと言って従うような女ではない。それでもその内側にある勝気な一面は隠しているつもりだった。現に永久子は初五郎と話しているときに一度だって歯向かうような態度を見せたことはなかったし、良く回るその頭でやつれて気味の悪い初五郎の顔に青筋を立てるような挑発や言い負かしなどをしたこともなかった。

だが、初五郎は嗅ぎ付けたのだ。

この女は寡黙で従順な女などではない
見た目こそしとやかそうに見えるが、何か自分に対して企んでいるに違いない

そう嗅ぎ付けた初五郎はすぐさま横柄な態度に変わり永久子をいびるようになった。

永久子にとってそれはたまらなく屈辱であつたが、どうする事もできない。

自分の堪忍袋の緒を切ってしまう事は簡単だ。
だが、それでどれだけの人間に迷惑をかけるか永久子は知っている。
それを思うと、まだ踏み止まれる自分がいた。

「承知いたしました。お疲れでしょう？ 食事の用意がしてありますわ。先にそちらになさいますか？」

そう言つて永久子は先程と同じようににつこりと作り笑いを浮かべ、初五郎を座敷へ連れて行つた。

第十一章 「帰宅」（後書き）

2ヶ月近く更新せずに誠に申し訳ありませんでした

8月いっぱい海外にいていたのと、試験期間だったのでお休みさせて頂きました。

連絡する暇がなくて本当にすいません。

今度また間が空く時はちゃんと連絡しますので今後もしょしくお願いします。

話は自分の頭の中でぼちぼち進んでおります。。。

見捨てずにたまに見ていただけたら嬉しいです！

第十二章 「視線」(前書き)

帰つて来た初五郎を部屋へと案内する永久子。
酒の勢いに乗つて不満をぶちまける初五郎に永久子は・・・

第十二章 「視線」

永久子が初五郎を通した畳の部屋には新鮮な鮪の刺身やぐつぐつ音をたてたすき焼きが用意されていた。

すき焼きの甘い醤油の香りが部屋いっぱいに広がっている。

「今日のご馳走なんですよ。久し振りにあなたが帰っていらしたから。」

初五郎が座ると永久子は初五郎に酒をつぎながら言った。

「お疲れでしょう？今日はゆっくりお休みになって下さいね。」

「…お前はゆつくり出来たろうな。毎日嫌味を言われる事がなくて。」

「

できるだけ優しく話し掛けたのにこれだ。

暫く会わないうちに初五郎は更に横柄になっている。

この男は一体何が気に入らないのだろう？

しかし、ここで黙っていたりはいそひそひなどと言ってはたちまちこの男は癪癪を起こすだろう。

見抜かれていても愛想良くしておくに限る。

「そんな事ありませんわ。夫の帰りを待たぬ妻がどこにいますしょう？毎日貴方の事を考えていました。」

初五郎は白々しいとばかりに小さく舌打ちをする。

本当にこの男は救えない。

まあ我ながら本当に下手くそな演技をしているとは思いが…

「…お仕事の方は上手くいつて？」

「…いつもの事だ。全部親父だ。大成功だ。」

「そうですか。」

「親父程仕事の才能がある人間はそうはいない。俺にはそれが無いから親父が死んだらお前はそんな小綺麗な服着られなくなるかもしれないなあ。」

酒が回ってきたのかだんだん初五郎の口調がたるんできた。

昔からこの場所で仕事をこなしてきてようやく東京にも足を出すようになった重造と違い、小さい頃から都会に何度も足を運んでいた初五郎はあまり方言を使わない。

地元でしか通じない言葉だというのを十分理解しているし、仕事の面でも、何だか聞き取りにくくやたら語尾が変わるわりにくい地元言葉より、いかにも東京らしい清楚な言葉で話した方が仕事の面でも有利だと言う事がわかつているからだ。

実際、ほとんど標準語が話せない重造の傍に、きちつとしたスーツを着て丁寧な標準語を話す初五郎がいる事によって商談が成立した例も少なくないだろう。

何せ、重造の言葉といえは話が弾めば弾むほど理解不能な御国言葉おへんこごになってくるのだから。

「お義父様は本当に立派な方ですものね。きっと将来は貴方もあの才を発揮なさるわ。親子ですもの。」

初五郎は飲みかけの酒が入った杯をかんっと盆の上に叩き置いた。

「はっお前に何が分かる！？この家の事なんざ何も興味がなくせに。親父は腑抜けちまつてるよ。あの婆ははあのせいだな。あいつのせいでうちはめちゃくちゃだ。あいつが親父から仕事のやる気まで奪ったら俺が絞め殺してやる。」

「婆ははあ」とは梅の事だろう。

永久子は初五郎が梅を相当嫌っている事を再確認した。さて、ここで永久子は誰ですか？その婆ははあとは？と馬鹿な振りして知らない風に聞き返すか、そんな事言うのいやめになってと梅を庇うべきか・・・どちらがより静かに事を終える反応だろうと考えてみた。

「あなた・・・」

とりあえず永久子はこのまま様子を見ることにした。

「あの女はな！この家に来た疫病神だ。あいつのせいでお袋は死んだ。親父はそんな事見向きもしないで傍に置きやがる。よりにもよって、お前の女中なんかにしやがってどんどんあの女は態度をでかくしていきやがる！」

初五郎は酒のせいか怒りに任せて発する暴言のせいか顔が真っ赤だ。結婚してから梅の事をこんなにも具体的に罵ったのは初めてだった。

「あなた・・・疲れてらっしゃるのよ。そんな言い方おやめになつて。今日はゆっくり休んでくださいな。」

できるだけ刺激を与えないように永久子は優しくなだめようとする。

「はっお前はもうあの女に操られちまつてるに決まつてる！お前が

今日こんなにも猫撫で声を出して優しそうにしてるのは俺のご機嫌取りをしてあの女に八つ当たりさせないようにしてるからじゃないのか!? え!? だいたいお前は・・・っ」

永久子は自分の考えを見透かされ、一瞬動揺の色を出してしまいそうになった瞬間急に襖が開いた。

「あ、失礼します。・・・お茶を運ぶよう言われたので。」

瑠璃だった。初五郎の大きな声に若干戸惑いながら遠慮がちに入ってきた。

不慣れな手でもたもたとお茶を運び出ていった。

「あの女見ない顔だ・・・それにここの生まれじゃないだろう?」

瑠璃の言葉遣いで初五郎はすぐに分かったらしい。

「ええ、先日新しく来た瑠璃ですわ。東京から来たんですの。・・・梅の親戚だとか。」

永久子は一瞬言おうか迷ったが、いづれ分かってしまう事だと梅との関係を付け加えた。

「・・・ふん、あの女のねえ・・・」

初五郎が瑠璃の出て行った後を見た。

その視線はただ睨むでもなく、笑うでもなく何とも謎めいている。

永久子は初五郎の思惑を読み取ることが出来なかった。

第十二章 「視線」(後書き)

これからどんどん新キャラをだしていく予定です！
・・・が話が進まない；

第十三章 「奈落」(前書き)

梅のために初五郎の機嫌を取る永久子。

夜 激しく犯される永久子が落ちていった「奈落」では

第十三章 「奈落」

夜

永久子の息がその動きと合わさり激しくなる。

「・・・あつ」

永久子が昼間きつく結った髪は既にほどこかれ絹の様な光を放ちながら畳に広がっている。

隙のない程鮮やかに着付けられたはずの淡い黄色の着物は部屋の隅に放られたままだ。

暗い部屋の中で月明かりによって白く照らされた永久子の肌にはうつすらと汗が滲んでいた。

初五郎の容赦のない責めが永久子の体を貫く。もつどのくらいこうしてこの男の一部を受け入れている事だろう

服を脱いだ初五郎の体は思ったよりも随分細い。

肋骨が浮かびくつきりとした筋はどこに力を入れているか容易に分かる。

初五郎は夢中で永久子を組強いている。

だがその目線の先はほとんど永久子には向かない。

永久子もそうだ。

ただひたすら苦痛に耐える。

時折目が合うと永久子の心を読んだようににやっと笑う。

「気持ちの悪い男・・・」

永久子は抱かれながら吐きそうな程不快な気持ちに陥る。

性欲の処理の為だけに私の体を欲っているのだろうか。
その為だけにこの儀式に耐えなければならないのか。
この男という間は一生……

このまま行けばいずれこの男との間に子を成さねばならない時が来るだろう。

産まなければならないのか？ 育てなければならないのか？

この男との子供を一生？

何と汚らわしいのだろう。

お互い愛もないのに。この男はこんなにも私を忌み嫌っていると云うのに。これではまるで凌辱だ。

そう思った瞬間永久子は急に泣き叫びたい気持ちに襲われた。

誰かにすがりたい。誰かに助けて欲しい。

誰か……誰か……！

いない。そんなものは。

私をこの奈落に突き落とす人間は山程いても手を差し延べてくれる人間など誰一人いはいない。

永久子は自分の一生を思い浮かべた。頬に一筋涙が伝う。

いつまでも続く激しい責めに永久子は次第に意識が遠のいていく。

「……いやっ……」

永久子は辛うじて聞こえる位の小さな声で叫び、気を失った。

目を覚ました永久子の視界は奈落の底のように暗かった。

暗い・・・暗く寒い・・・どうして私はここに？何故？

誰もいないのだろうか？助けを呼びたい。

だが何の気配もない。一人だ・・・この暗闇の中で。

「私はどうなるの・・・？このまま死んでしまふの！？」

叫んでみるが返事はない。

「嫌・・・嫌よ、こんな・・・こんな孤独な場所で。酷い、酷いわ
！！」

こだましない暗闇の中で永久子の意識はまた遠のいていく。死ぬのか？何故？

そう、私の生きている日々は余りに孤独過ぎる・・・

また意識が遠のいていく中誰かの気配がした。

誰か・・・いたのだ。

永久子は体に力が入らない。

ただうつ伏せて倒れてしまっている。起きたくても起き上がれない。立ち上がる力を抑えるように体が重い。この金縛りの様な感覚は何なのだろう。

永久子が懸命に頭を上げようとしているとその誰かはゆっくりと永久子に近付いた。

そして永久子の手を優しく握った。

暖かい・・・男の手だ。

その男は永久子の体をゆっくりと持ち上げ、どこかに運ばうとしている。

この男は誰なのだろう？誰だかわからない・・・初五郎ではない。
私の知らない男だ。
まだ会った事のない誰かが私を運んでいる。

「貴方は・・・」

誰？と問いかけようとした瞬間目を覚ました。

「奥様・・・奥様っ！！」

目を開けるとそこには顔面蒼白の梅と瑠璃がいた。

「大丈夫ですか！？何だかとても魔うまされてらっしゃいました。」

瑠璃が心配そうに永久子に話し掛ける。

「・・・大丈夫よ」

永久子はやつとの事で返事をする。

やはりあれは夢だったか。

先程は混乱していたからわからなかったがあんな事が現実であるはずがない。

とするとさつき運ばれたのも夢だったのだろうか？

「瑠璃！！何しつる！！はよ奥様に羽織り！！」

必死の形相の梅が瑠璃を叱咤した。

永久子は自分の体を見た。服を来ていない。裸のままだ。
だから夢の中であんなに寒かったのか？

「本当に酷い・・・初五郎様は・・・！」

梅は涙を滲ませている。

どうやら初五郎は昨日散々永久子を犯した後裸の永久子をそのままにして出掛けていったらしい。

「寒いわ・・・」

永久子の体が震える。

「今暖かいお茶をお持ち致しますけえ、辛抱なさってくださいあ。瑠璃、はよー！」

梅が瑠璃を急かすと瑠璃は慌ててお茶を沸かしに母屋の方へ走って行った。

「明け方頃に初五郎様が部屋から出てきたんで、不思議だと思ったんでしあ。でも永久子さん起こしてしまうから確かめなかったらこんな・・・永久子さんは大切な富田家の奥様なんにあんな仕打ち酷いこつです。」

梅は本当に悲しそうだ。自分のせいで永久子がこんな寒い思いをしてしまい申し訳ないと何度も謝ってきた。

「梅、貴方は関係ないのだからそんな事やめて頂戴。」

「でも・・・」

「良いのよ。ただあの人が私の事を気に入らないだけなのだから。」

あの男・・・私が死ねば良いとでも思ったのだろうか？

いくら梅雨の残った蒸し暑い夏と言えど裸で放っておけば風邪を引く事くらいわからないのだろうか。

まして永久子の体はそこまで丈夫には出来ていない。

ふざけた男だ。

永久子は梅が用意した着物の袖に腕を通した。

一方梅にお茶を頼まれた瑠璃はまだ母屋に留まりお茶を煎れるのに手こずっていた。

「あつつー!!」

沸かしたお湯を入れてすぐの急須の蓋を思いっきり掴んでしまった瑠璃は慌てて手を放した。

ガチャンッ

落ちた急須の蓋がけたたましい音を立てて床に飛び散る。

「ああ・・・」

瑠璃は慌ててしゃがみ急須の欠片を拾い集める。集められた欠片はかちやかちやと音を立てている。

「おい、お前。」

瑠璃が振り向くとそこには初五郎が立っていた。

「は、はい・・・」

足音もなく忍び寄った初五郎に急に話かけられて瑠璃は飛び上がらんばかりに驚きながら返事をした。

「あ、あの・・・すいません。急須が熱くて・・・」

瑠璃は初五郎に急須を割った所を見られて怒られると思ったのだらう。

しどろもどろになりながら事情を説明する。その様子を眺めながら初五郎は目を光らせた。

「お前・・・瑠璃とか言ったな。」

「はっはい、先月東京から参りました。萩野瑠璃はぎのるりと申します。ここに長く勤めている叔母の萩野梅はぎのつめの縁で働かせて頂いております。」

初五郎は何も言わない。

ただ、瑠璃をじっと見るだけだ。

舐め回すような視線に瑠璃の小さい体は更に小さくなる。

「あ・・・あの・・・」

初五郎が一步步瑠璃に近付いていく。

「・・・初五郎様？」

怯える瑠璃の大きく丸い瞳には不敵に笑う初五郎が写っていた。

第十三章 「奈落」(後書き)

今回は永久子の中にある永久子自身が気付いていない心の闇を少し書いてみました。

孤独でない人間は一人もいないと思います。

ただ、その孤独の度合いが違うだけです。きっと。

第十四章 「詩心」(前書き)

風邪で体調を崩した永久子の元に封筒が届く。
その中身は・・・

第十四章 「詩心」

もうそろそろ梅雨明けの空気もとび、今年は少し乾いた夏になりそうだ、と永久子は自分の寢床に潜りながら思っていた。

もう太陽は遥か上に昇り、昼を告げているが永久子は寝巻き一枚に薄い布団をかけ横になっている。髪を下ろしてまとめ、いつものきつちりとした着物姿ではない永久子は何時もより若く見える。化粧をしていないせいだろうか。

少し咳き込みながら永久子は寝返りを打った。

そう、永久子はこないだ初五郎に裸のまま一晚置き去りにされたせいで案の定風邪を引いたのだ。

しかも、こじらせたらしく長く咳が止まらない。

激しい咳が続き、最後にけほんっと軽く咳をしてまた寝返りを打った。

「ふう……」

初五郎め……あの男……

永久子は怒りが治まらない。

もし自分の夫を好きにしていという許しが出たなら永久子は真っ先に初五郎を近くの川に突き落とすだろう。一晚中自分と同じ目に合わせてやるのだ。

後はどんな酷い目に合わせてやろうかなどと永久子が叶いもしない復讐を思案していると梅の聲が小さく聞こえた。

「……永久子さん、起きてあすか？」

「・・・ええ、大丈夫よ。どうぞ入って頂戴。」

そろそろと襖を開け、梅が入って来た。

「起こしたか？御加減の方どうですか？」

「そうね・・・大丈夫とは言えないわね。」

咳をしたばかりの擦れた喉で、永久子は小さく返事をした。

「そうですか。そう思ってお薬お持ち致しやした。」

「薬？それならさつき飲んだけれど。」

「いえ、そつちでなくこつちです。」

そう言つて梅が見せた茶色の大きな木盆の上には一杯の湯飲みに入つたどす黒い色をした液体が入っていた。

「・・・これは？」

さすがに永久子もあら、ありがとつと気持良くは受け取れない色だ。

「私が昔から作つとりやす煎じ薬です。特に風邪には良く効きますけえどうぞ召し上がってくださいあ。」

梅はにこにこその泥の色そつくりの煎じ薬を永久子の方に差し出した。

「・・・何が入っているの？」

永久子は顔をこわばらせた。

「それはもう色々と！長年選^ひ抜いた体によか物をどっさりいれと
りやす。いつも馴染みに分けてもらうとる朝鮮人参や萩^{はぎ}の草なんか
です。」

「・・・これ、飲まなきゃいけないかしら？」

永久子は出来たら飲みたくないと言う意思をさりげなく梅に伝えて
みた。が、梅にはその意思は伝わらなかったらしい。

「はい！是非飲んでください。永久子さんのお体がはよ良くなるよ
う一生懸命に作りましたけえ。」

永久子は降参した。そこまでして梅が作ってくれた物を無碍^{むげ}にする
のも悪いし、こんなに梅が気合いを入れているとなると今断わって
も永久子が寝ている間に無理矢理飲まされかねない。

「分かったわ・・・飲みます。」

観念して器を受け取った永久子を見て梅はとても満足気だ。

永久子は煎じ薬の入った湯飲みを見ながらごくりと唾を飲み込んだ。
もちろん煎じ薬を飲みたくてそんな事をしたわけではない。

永久子は目を瞑りえいっと一息にその煎じ薬を飲み干した。

・・・苦い。

今まで自分が味わったどんな物をもしのぐ苦さだ。

苦さの余り永久子は思いつきりむせて激しく咳き込んだ。

梅は急いで永久子の背中を擦る。

「大丈夫ですか！？そんないきなり飲み干しては咽むせますあ。」

そのせいじゃない、と永久子は言いたかったが声が出ない。息継ぎぎも危いうい。

「みつ水を・・・！」

永久子は涙目になりながら精一杯の力を振り絞り言った。

水で苦味を流し、ようやく落ち着いた永久子はまた布団に横たわる。

「とっても効きそうだけど・・・今度はもう少し少なくて良いわ。余り多くは飲めそうにないから。」

ますますやつれた顔になった永久子を見て梅は心配そうにしている。

「量が多すぎたかしりゃあせん。でも、きっとこれで良くなりますけえ。」

梅が湯飲みを片付けていると、他の女中が入ってきた。

「失礼しりやす。奥様に郵便です。」

そのやや若い女中は手に茶色の大きめの封筒を持っていた。何か冊子が入っていきうな大きさだ。

「何です、奥様は風邪ふんひいて臥ふせておりやす。後にしなせえ。

「

厳しく叱る梅を永久子が制した。

「良いわ梅、ちょっとあなた。その封筒の差出人はどなたなの？」

その女中は急に永久子に話し掛けられて戸惑いながらも「こもこも」答えた。

常に永久子の側にいて世話をする梅の様な人間はさすがにもう慣れたようだが、永久子の身分とその美しさにこの屋敷の大抵の人間はまともに返事を返す事が出来ない。

「はっはい、えつと・・・えつと・・・」

「何、早くしなせえ。」

慌てて封筒を引っくり返し差出人の名前を探す女中を梅が急かす。

「あ、ありやした。えつと・・・うた・・・こころと書いてありや
す。」

「ちよつとお見せ。」

永久子は急に跳ね起きその女中の手から茶色の大きめの封筒をふんだくった。

急いでその封筒に書かれている字を確認するとさつき女中が読んだものよりもっともつと長い文章でこう書かれていた。

《千美会 詩心 編集部》
せんびかい ししん

「ああ・・・」

永久子は嬉しさの余り大きな溜め息を漏らし、女中の方にくるりと振り返った。

「良く持って来てくれましたね。本当に有難うご苦労様。元の仕事に戻って頂戴な。」

急に満面の笑みを向けて感謝された女中は驚きながら小さく返事をして部屋を出て行った。

直ぐに永久子は茶色の封筒を丁寧に指で開け、中身を確認する。中には、細く上品な毛筆で「詩心」と書かれた厚めの冊子が入っていた。

表紙には夏の花である朝顔の水彩画が描かれている。永久子はその冊子を大事そうにぱらぱらとめくり、ある所でぴたりと手を止めた。

「ああ・・・ああ、見て頂戴梅。何て素敵なお事なのかしら。」

永久子は自分の見せたい所を指を指しながら梅の鼻の前まで持って来た。

「ここよ、ここに私の詩が載っているの。何て素敵なんでしょう。とても素晴らしいわ。」

永久子は風邪などずっとんでしまったかの様にうきうきしている。

「詩心^{ししん}」は梅が作った煎じ薬より良く効いたらしい。

「私が詩を詠むのが趣味なのは知っていますでしょう？これはね、私が東京にいた頃から毎月愛読している冊子なの。とても良い詩ばかりだね、詩を送っても中々載らないのよ。私が今まで送ったものも

一度も載せてもらえなかったわ。
でも見て頂戴。ここに私の詩が載っているの！とても素晴らしいわ
！」

永久子は嬉しさを抑えきれないらしく頬を赤くして興奮している。

「それは素晴らしい事ですねえ、ほんつに素晴らしい事です。
ここに嫁ぎらした日から良く詩を詠んでましたからねえ。とても素
晴らしいものばかり。」

梅も嬉しそうにここにこ笑う。

「ふふっ、そうね。ここに来てからはすっかり詩の世界に耽ってし
まって・・・何て素敵な文学なのかしら。本当に素敵・・・」

梅が出て行くと、永久子は詩心を自分の寢床の横に置き、寝付くま
で嬉しそうに眺めていた。

自分の詩が載った。自分の詠んだ詩が。

それは永久子にとって久しぶりに感じた誰かに認められたと言う喜
びだった。

第十四章 「詩心」(後書き)

またサボってしまいました；

いかなですね。ちよっと間が空くと。

早く更新しろとお咎めを受けたので就寝前に更新。

頭の中ではどんどん進んでいくのに自分自身が置いてかれてる感じが
です。

携帯で打つの面倒くさい

第十五章 「空間」(前書き)

詩^し心^{しん}に自分の詩が載り、浮かれた永久子は過ちを犯す。
その過ちとは・・・

第十五章 「空間」

富田家の屋敷の一番奥の一室が永久子の部屋だ。

永久子好みの装飾に彩られたその部屋は重造がわざわざ職人に作らせた家具の他に新たに大きな本棚が置かれ、一人で使うのには少し大きめの書斎机が上品な艶を出し光っていた。

この二つは永久子自らが長崎の有名な職人の所に注文し作らせたものだ。自分は文学が好きだから、たくさんの本をしまっておける本棚と詩や文を書くための机が欲しいと初五郎に頼んだのだ。

二人きりで話していると自分を何か卑しい動物の様な目で見下し相手にしてくれない初五郎も重造の前では普通に接してくる。それでも充分そっけないのだが。

だが、永久子はそれを上手く利用してわざと重造を困んだ食事時に切り出した。

「貴方、わたくし私お願いがあるんです・・・」

初五郎の動かしていた箸が止まり、額の筋がすじ一拍脈を打つ。

「おお、何だね永久子さん！何か買って欲しいものでもあるんか？何でも買ったあれ初五郎！お前ちゃんと奥さんに甘えさせとるんか！？いかなぞ初五郎！」

初五郎と永久子がそれなりにうまくいっていると思っている重造は騒々しく初五郎を急き立てる。

持っている茶碗には梅が溢れんばかりに大盛りによそった炊き立てのご飯が既に半分なくなっている。

いつもは煩わしい顔を見せながら面倒な事は無視を決める初五郎も父親の言う事はある程度聞くらいしい。

「分かつてる。何でも買うさ。望むものなら何でも。」

でも離縁はさせないんでしょう？

俯きながら永久子は心の中で嫌味を言った。

「私^{わたくし}の欲しいものは・・・」

そう口を開いてから一月^{ひつぎ}後に届いたのがこの本棚と机だ。

欲しいと言ったその日に重造の命令で梅が手配した。

梅が連絡役なのを良い事に永久子はしっかりとした上質の無垢の木が良い、塗りは丁寧な拭き漆にして欲しいとあれこれと希望を述べた。

そうして出来上がったのが目の前にあるこの本棚と机である。

夏も終わりの方に傾き始め、蝉の鳴く声も小さくなってきたが、まだ十分に残る湿り気のない暑さの中でもこの書斎机はひんやりとじていて気持ちが良い。

永久子はこないだ詩心に自分の詩が載った事ですっかり浮かれていた。

この新しい机の上からいくつもの素晴らしい詩を自分の手で作り出すのだ、と思うとうきうきしてくる。

長く味わったことのない高揚感が永久子の体を満たしている。

ようやく自分の没頭できる空間が作れたのだ。

永久子はほとんどの時間を自分の部屋で過ごすようになった。

そしてその部屋の中で過ごす時間の大半を詩を作る事に費やす。

それが永久子の至福の一時であり、一人でいる時自分を保つための唯一の方法となった。

「縛られし 我が心の傷 癒されず 尚も深く 痛み覚えん」

「かの夢に 押される我が身 朽ち果てぬ 行く手遮る 数多あれども」

永久子は次から次へと多くの詩を詠んでは詩心に投稿した。

それは、初五郎に嫌がらせを受けて苛立っている時に捌け口る為に詠んだ詩であつたり、詩人を夢見る自分の理想を詠った詩だったりした。

永久子はようやく自分の居心地の良い空間を見つけられた様に感じた。

そして永久子の詩は徐々に詩心に載る機会が増えていき、「永久子」の名は次第に広まっていった。

永久子は詩心に自分の詩を送る時自分の名前を「永久子」のみにして送っていた。それは自分の空間に「富田」の姓を入れるのが嫌だったからだ。

しかし、有数の公家の一人娘であり、全国でも指折りの大会社の後取り息子と結婚した永久子の話題性を世間が放っておくわけがない。

「あの佐原家の令嬢で、長崎で一番の権力を誇る富田造船所に嫁いだ富田永久子が詩人である。」

と言う話は瞬く間に広がり富田の家には多くの新聞社や雑誌の編集部や永久子の詠んだ詩に対する便りが全国各地から送られてきた。

「見て頂戴な梅。この便りは東京から届いたものよ。私の詩に感銘を受けてくださったんですって。」

自分の力が全員に認められたわけではない。中には、ただの興味本意や冷やかしの人間もいるだろう。

いずれ詩だけで認めさせる事が出来ればそれで良い。

永久子は今富田家の広く狭い籠の中から抜け出し、外の世界と関係

を持てた事だけで満足だった。

しかし、その充実した日々とは逆に富田家の中での永久子の居場所
はどんどん狭められていた。

いつも重造は母屋で過ごしている。

元々そこで過ごしていたわけではなく、永久子が来るにあたって新
婚の二人の場所を作らなければならぬだろうとわざわざ母屋に越
したのだ。

しかし、永久子にしてみれば何て余計な気を使ってくれたのだと言
う思いでいっぱいだ。離れに重造の目が届かないせいで永久子に対
する初五郎の扱いは更に酷い事になっていた。

昼間から堂々と永久子に何かすれば梅によつて重造の耳に入る事が
分かっている初五郎は夜にその牙を見せた。

声が漏れないようにしっかりと雨戸が閉められた寝室からは永久子
の呻きにもとれる喘ぎ声が毎晩の様に聞こえた。

「い……つやですっ」

永久子は必死で意識を失わないように目を開く。

目の前には暗がりの中永久子の体に爪を立てる初五郎が此方を見て
いる。

その目は気の狂った悪魔の様な目をしている。

爪で掻きむしられた乳房からは僅かに血が滲む。

「……あなたっ……やめて……」

悔しい。こんな男に何故こんな事をされなければならないのか。

何故私はここで陵辱を受けているのだ。

沸き上がる憎しみに似た悲しみを永久子は必死で抑える。

自分さえ我慢すれば何も起こらないのだ。

富田家も佐原家も私達の間の事に気が付かなければ丸く治まる・・・

「嘘をつけ・・・」

初五郎が冷たく暗い声でぼそりと言った。

「え・・・？」

永久子は何と言ったか聞き取れなかった。

「嘘をつけこの淫売がっ・・・その大人しそうな仮面をとつと脱いだらどうだ?!それとも剥ぎ取ってやろうか!?!」

永久子は何を言っているか分からない。

「一体何の話を・・・？」

そう言いかけたその時初五郎は永久子の首に手をかけた。
痩せこけた体の何処にこんな力があるのだろうか。初五郎は思いきり永久子の首を絞めた。

「・・・っ!!」

永久子は息が出来ない。白く透き通るような永久子の顔がみるみる赤くなっていく。

殺される

息が出来ず、意識も朦朧として来たその時初五郎が避けた。

「俺を馬鹿にしているのか！？あの本に載せたのは俺の事だろう！？」

しまった、と永久子は思った。顔にも出ていたかもしれない。永久子はようやく初五郎の怒りの原因を理解した。

初五郎は詩心を読んだのだ。

詩心には自分の生活を織り混ぜた詩も載せている。

初五郎は永久子が初五郎に対する愚痴を吐いた詩を見たに違いない。それでこんなにも気が狂ったように怒っているのだ。

自分は何と浅はかな女なのだろう。

浮かれ過ぎて一番気を付けなければならぬ事を忘れていた。

詩心は何も文学を好んだ女人だけの読み物ではない。

あれだけ話題になっっているのだ。

初五郎があの本を手にすると言う事態も考えねばならなかった。

「ち……がう……」

本当は違わないが、今肯定したら本当に殺されるだろう。

永久子は息の出来ないその喉から必死に声を出した。

「よくも恥をかかせたな大人しそうな顔をして！お前は俺をそう思っていたわけだろう！？富田の金をむさぼる卑しい一族め。」

初五郎が喚いている。

だが、永久子はもう答える事が出来なかった。永久子の首を絞めている初五郎の手に更に力が入る。

このまま死ぬのだろうか？

死んだら何処へ行くのだろうか？

このままこの男に殺されるのか？

こんな最低な男に・・・？

自分はどんな一生を生きて来たのだろうか？

悔いなく死ねるのか？

いや、このまま死ぬのだけは絶対嫌だ。

絶対にこの男から逃げてみせる。

自由になってみせる。

精一杯の力を振り絞り初五郎の手首を折れそうなくらい強く掴んだ
まま永久子は意識を失った。

第十五章 「空間」(後書き)

いつも後書きを書くのを楽しみに更新してるんですが毎回書くネタが思い浮かばなくてここに一番時間がかつてる気がします。。
何かお題とかないかな。。

あ、今後も引き続き「女に生きた女」をよろしくお願いします！
(
宣伝?)

第十六章 「強制」(前書き)

激しく初五郎に折檻を受けた永久子。
衰弱した永久子は

第十六章 「強制」

身体中が痛む・・・

何時間折檻のような夜伽を受けただろうか？

自分でもしくじったと恥ずかしくなる。

昨夜初五郎は永久子が詠んだ自分に対する愚痴を詠った詩を見て激怒し一晩中永久子に暴力を振るった。

永久子の艶のある真つ白な素肌は初五郎の怒りの傷痕で所々赤黒く変色している。

初五郎は永久子の想像以上に理性をなくすと手のつけられない人間だった。

あの男は危険すぎる。昨夜の仕打を思いだし永久子は大きく身震いする。

その身震いでさえ永久子の弱り切った身体に鋭い痛みを走らせる。

「・・・・・・・・」

永久子が身体中に走る痛みに堪えながらゆっくりと起き上がると襖ふすまが勢い良く開いた。

「ぐずぐずするな、早く着替える。」

昨日の怒りに満ち赤い顔をした初五郎は消えていたが、代わりにいつもより更に冷たく青い顔で此方こちらを睨む初五郎と目が合った。

既にきつちりとした背広に着替えている。いつもと同じ仕事に行く様な服装だ。

永久子をさげすんだ様な目で見ると、初五郎は無言で襖を勢いよく閉めて出て行った。

「はい・・・」

いなくなつた襖に向かつて永久子は小さく返事を返した。

どうすれば良いのだらう、この男から逃げるには・・・

今までどれだけ事態が険悪になつても何とかそれを避ける事が出来ていた。

「自分さえ我慢すれば良い」と言い聞かせて怒りや恐怖に満ちた感情を抑えてきた。

だが、もう駄目だ・・・このまま事を荒立てずにやり過ごすなど、自分の気持ちを知られてしまった永久子には耐えられない。

詩心ししんを見た事によつて、これで初五郎はいくらでも永久子に折檻する事が出来る権利を与えられたのだ。

玩具を与えられて子供の様に喜ぶ初五郎の姿が目に見えぬ。

また昨夜の様な拷問が起こつたら今度こそ命を取られかねない。

今の永久子にはいつもの様な自身が消え失せた恐怖のみが支配している。

だが、こうしている場合ではない。早く全てを隠さなければ。

梅に気付かれないように永久子はさつと身支度を整えて上等な着物を選ぶ。

さて、どれにするか。

ずきずきと痛む身体を引きずりながら永久子は着物を選び始めた。

よりによつて今日は初五郎の仕事関係の集まりに妻として一緒に出なければならぬのだ。

親しい者達だけの会だと聞いているが、店はかなり豪華な所を選んでいるらしい。

それなりの格好をしていかなければ富田家の者として恥をかく事になるだらう。

永久子は昨日選んでおいた数着の着物を一着ずつ手に取り確かめる。

紺色が桜色がいいと思っていた。

どちらも斬新であるし、特に紺色の着物の方は濃く藍色に近い紗綾^{なや}形^{がた}が彩られ落ち着きがある中に

しつかりとした印象を残せる中々の着物だ。

だが、今の永久子の身体はそこかしこに傷がある。

しかし、初五郎もわかっていたのだろう。見える部分に目立つ傷はない。

でももし袖がめくれてうっかり赤く腫れた腕など見えようものなら大事^{おおいじ}になるだろう。

それだけでなくとも絶大な権力を誇る富田と古くから名を知られた佐原家の結婚で注目を浴びているのだ。

いくら普段の集まりより人が少ないからといっても噂はどこから立つのかわからない。十二分に注意すべきだ。

永久子は濃い朱色の着物を選んだ。ここの女中がいつも着せられているような朱色ではなく、もっと深くもっと上品な朱色だ。

朱色というよりは寧ろ茜色に近いだろうか？透き通りそうな緋の色の入った着物は薄い金色の上品な雪輪模様が入っている。

これなら痣が見えても隠せそうだ。

永久子が手早く着物を着つけ、髪を梳いていると、梅の声がした。

「失礼しやす。」

梅が襖越しに挨拶をしてきた。

いつもより気分が良いのか襖ががらつと勢いよく開いた。

「おはようございあす。永久子さん、そろそろお出かけの支度をし
て頂きたいのですが。」

梅が何も知らない無垢な顔で此方を見る。

その顔を見た永久子は何故かただただ子供の様に泣きじゃくりたいという絶望的な感情に襲われた。

だが、駄目だ。きつと梅は自分以上に激しく落ち込んでしまう事だろう。

何も悪くはないのに泣いて自分を責めるに違いない。梅は優しすぎるから。

梅とて辛いだろう。好きな男と籍を入れる事もできずだが近くに身を置かなければならない。

恋い慕う男の息子には忌み嫌われ、おまけに私の様な人間の世話まですることになったのだ。

永久子は自分らしくもないと思いながらも悲観的になる。

梅はきつと優しく弱い人間だ。自分の事でさえ耐え切れず折れてしまいそんな繊細な心を持っているのに私の問題まで抱えてしまつては梅の心労は更に重くなってしまつたろう。

梅にはこの先自分がどんな目にあおうと黙っていようと思った。

しかし、今これだけ可哀想な人間が自分を置いて他にいるのだろうか

いつもは意志の強さで多少の荒波を切り抜けてきた永久子だったが、昨夜の仕打ちで相当心が弱っている。

こういう時に自分はやはり女なのだ、と思い知らされる。

しかし、その素振りを見せるわけにはいかない。結局は今までおりに過ごしているのが一番いい方法なのだ。

「ええ、今しているわ。髪を結うのを手伝って頂戴。」

永久子は微笑む元氣すらなかったのだが、梅は勘が良く、少しの演

技ではすぐばれてしまうので、

いつもより更に笑顔の皮を被り永久子はにつこりと笑った。

永久子の黒く艶めく髪が梅の手によって綺麗に結われていく。

「今日は色々お偉方がいらさるそうですねえ。」

「そのようなね。私はまだお会いしたことがないけれど・・・野本八夜のものはちやさんがいらっしやるとか。」

「野本八夜！それはそれは・・・私でも知っておりやす。有名な学者様で論文いくつもだしとるとか。ここいらの者は字が読める人間が少なあですから何の勉強だか知りやあせんが。」

「野本八夜さんはね。とつても偉い生物学者の方よ。私もあまりそういうのは詳しくないのだけれど全国の学会で発表なさったり論文で幾つも賞を頂いてる方なの。一度あの方の本を読んだ事があるけれど、真面目に勉強してらして、素人の私でもとてもわかりやすかったわ。お会いできるといいわね。」

野本八夜の父親もまた有名な学者だ。

八夜の父、幹成みきなりと重造は昔からの友人であると言う。

利口な学者と金を生む天才の縁がどこから始まったかは知らないが、野本八夜はその関係で今日の会に出席するらしい。

永久子は知識を持つ人間が大好きだ。

野本八夜の本は理学の事を知らない永久子でも何かくすぐ撥られる魅力を感じて秘めていた。

実際にあつたらこの男はどのような事を話すのだろうか？どのような知識を持っているのだろうか？

それは永久子の知識に対する意欲を満たしてくれるだろうか？

久しぶりに学の交換が出来る相手を見つけ事ができるかもしれない・・・

そう考えると今日の沈みきった気分も少し晴れてくる。

ぼろぼろになった体を綺麗な着物と飾りで装いいつもと変わらぬ美しさで永久子は梅と共に初五郎と重造の待つ門へと向かった。

第十六章 「強制」(後書き)

また随分更新が開いてしまってますいません
友人に催促されまくったので更新です。

ただ書いてないだけで、話が行き詰ってるわけではないのでどうぞ
ご安心を(笑)

第十七章 「八夜」(前書き)

重造、初五郎と共に列車に乗った永久子・・・
着いた宿で永久子は初めて八夜に会い

第十七章 「八夜」

永久子は重造や初五郎と共に列車に乗り、目的の場所へと向かった。今日は、重造と初五郎が古くから関係を持つ仕事の相手や友人などが招待されているらしい。

長崎でも老舗の宿を貸し切ったらしいが、来る人数はせいぜい三十人程度だという。

これだけの企業なのに、それだけしか招待しないのだからほとんど身内同然のものばかりなのだろう。

私がまだ紹介してもらっていない者も多いのだろうか？

永久子はやっぱりその中でも野本八夜のこと気がになっていた。

八夜は最近東京の学会で発表し、そこでもかなりの人気を博したと言っ。

今回もきつと八夜の所に人が集まるに違いない。

だが、それに掻き消されない程度に且つ富田家に恥をかかせないよう永久子は目立たなければいけない。

それが永久子の富田家での仕事の一つでもあるのだから。

永久子は俯いた顔を少し上げ、ちらつと初五郎を見る。

初五郎の顔は、相変わらずの仏頂面で全く表情が動かない。

昨夜の事は何もなかった事にしているらしい。当たり前なのだが、あれだけ恐ろしい姿を見せておいてよくもまあ何事もなかったようにこの男は済ましていられるものだ。

永久子は嫌悪の気持ちでまた目を伏せ俯いた。

何も知らない重造はしきりに初五郎に今日集まる人間について話をしていた。

「お前そんなにいつもより人が集まらねからって仏頂面さげてちゃいけねえ。まあお前はいつも顔変わらんからな。だけど、今日は

今日で偉いんばつか来るんだし、俺の友達も多い。八夜も来るしな。よう持て成しとけ。」

それから重造はすごかった。

一人一人の来客の情報を重造はすらすらと上を向いて読み上げている。

どんな仕事をしているどんな人間であるか、その見た目から食べ物の好き嫌い、嗜好品まで言葉に詰まる事なく喋り続けていた。

目的の駅に着くまで重造はずっと喋り続け、初五郎でなく永久子でさえ今日来る一人一人の人間が頭に入ってしまった。

「八夜ん事は話さんくてもわかっちゃるな、最近はいいつ忙しすぎためつきり会っちゃらんが。

きつと変わらず良い奴じやろう。俺はあんま学問ちゅうのができねえ。字もとんと読めねえし、難しい紙切れはお前に任せつきりじや。だが、八夜のやつとる学問ちゅうのは中々面白い。俺みたいな阿呆でもわかりやすいようにあいつは言うしな。お前も良い機会じゃからまた聞いとけ。そいういやあいつの好物の酒は出とるかな。あいつはあの顔でうんと濃い焼酎しか飲まんからな。」

重造はこの様に実際に会い、自分に関わった全ての人間を覚えていくのだ。

永久子は改めて重造のその頭の良さときれのある考え方に舌を巻いた。

この男がいるからこそ、富田家は莫大な資金を欲しいままに贅に浸っていられるのだ。

この男はすごい才をもっている・・・だが、永久子に一瞬不安が過ぎる。

逆に、もしこの男がいなくなれば富田の家はどうなるのだろう・・・

「どうしゃった？永久子さん。もうそろそろ駅につくぞ。」

「・・・いいえ、何でもありませんわ御義父様。」

永久子のはつと我に返り、急いで重造にしっかりと作り笑いをして見せた。

重造は簡単に騙されてくれたらしく、満足気に永久子を見て下車した。

重造に続く初五郎の三步後ろに下がりしずしずと後をついていく。

こう言う時男尊女卑とか言う馬鹿馬鹿しい掟が役に立つと永久子は自分を嘲笑った。

取り合えず部屋に案内されるまでは初五郎の顔を見ずに済むからだ。ほんの僅かな時間ではあるのだがその時間さえ永久子は初五郎と顔をあわせたくなかった。

駅の傍にあるその宿にはすぐに着いた。

質素だが、昔からの貫禄が深く染み付いていて中々重厚な佇まいだ。一見古めかしく沈んだ焦げ茶色の建物で決して大きくはないのだが、その作りは中々のものだった。

ふと、その入り口を見てみると女性が一人立っていた。

「お待ちしておりました。重造様。初五郎様。・・・それに永久子様。」

四十を過ぎたかどうかの少々痩せ気味のその女性は透き通る白い顔でにつこりと微笑んだ。

黒い髪にはまだ艶があり宿の女将らしく、きつちりと髪を上結び

上げている。

白と薄い桃色の交じり合った明るい色の着物には珊瑚の珠がさりげなく裾についていた。

若い娘に似合いそうなその着物を自然に着こなすその姿を見て、永久子は自分もその着物が欲しくなった。

「おお、さく。久しぶりじゃ。どうじゃ、初五郎の嫁さんは美しかる？」

重造はにこにここと永久子を紹介した。

「良く名前ぞ知つとつたな。色綺麗、顔綺麗の言う事なしじゃ。俺はこんな美しい人は今迄見た事がねえ。」

「ええ。私もですわ。かの有名な佐原家の永久子様がこんなに美しい方だったなんて。初五郎様も素敵な方に嫁いでいらしもらった事。」

「おお、おお、褒められとるぞ初五郎。よがつたな。永久子さん、こつちの女はさくと言つてな。この宿の女将じゃ。富田とは深い馴染みでな。よう知つとるけ、気軽に何でも聞いたらええ。」

「初めまして永久子様。菅野桜と申します。宿「朱雀」を仕切っております。何なりとお申し付けくださあね。」

人の良さそうな顔で桜はにつこり永久子にお辞儀した。
口元にある黒子がほんのり色気を出してとても美しかった。

「富田永久子です。まだ、富田に嫁いで日の浅い人間ですが、これからどうぞよろしく願います。」

そう言つて、永久子は深くお辞儀を返した。

初五郎はと言うと、少しお辞儀をして後は我関せずさつさと宿の奥に入ってしまった。

お互いの紹介も済み、永久子達は宿の置くにある広間へと通された。通された広間は特別広いわけではなかったが薄い金と銀の細かい線の入った美しい壁には幾つもの高価な絵画が飾られ所々に置かれた足が細く丸い形をしたテーブルには大きくゆったりとしたワイングラスが人数分置かれていた。

こんな田舎な場所で良くここまで洒落た空間を用意出来たものだ、と永久子は感心した。

これも桜が用意したものだろうか？

座敷でなく椅子も用意されていない所を見るとどうやら今日の催しは立ち通しの様だ。

昨夜散々初五郎にいたぶられた永久子には少々きついものがある。

「おお、おお、豪勢じゃなあか。良くここまで飾りつかつておつたものお。」

重造は入るなり満足した様子でそう言つた。

「だがちいとばかりあれだな。俺は体が重いから。あまりなごお時間立っているんはしんどい。椅子はないんか？」

さつきこの店に来てからまだ少ししか経っていないと言うのに重造はもう疲れたらしい。

確かに栄養を蓄えた過ぎたその体では疲れやすいのも無理はないが、それにしてもあまりに早いと永久子は驚きとおかしさで顔が歪んだ。

「あらあらごめんなさいね、私^{わたくし}つたら。重造様は疲れやすいんでし

たものね。申し訳ありません。」

そう言うと、桜はすぐにいくつか椅子を持ってこさせた。持つてくるなり、重造はすぐに椅子にどかっと座り込み息をつきながら扇ではたはたと自分の顔を扇いだ。

「やあ、もう来ていたんですかおじさん。初五郎も。」

後ろからそう声が聞こえたので振り替えるとすらりと紺の背広を着こなした男性が立っていた。

鼻の下に少し生やした髭は小綺麗に整えられ左右対称にぴんと伸びている。

少しだけ白髪の入った髪の毛はきつちりと七三に分けられていた。身なりを見ただけでは染めないその髪が初老の様な雰囲気をもしだしているが肌の艶や顔立ちを見れば恐らく永久子より少し年上と言った所だろう。

「やあ、この方が君の奥さんかい？かの有名な佐原家の。初めまして。野本八夜と言います。今は学者をしています、学生時代は初五郎の先輩だったんですよ。」

すらすらと自己紹介してきたその男こそが今日永久子が密かに会うのを楽しみにしていた野本八夜だった。

「初めまして。富田永久子です。主人がお世話になりました・・・」

何が主人だと心の中で悪態をつきながら永久子は澄ましてお辞儀をした。

「とても美しい方でびっくりしました。初五郎は本当に良い方に嫁

いでもらったものだ。感謝しなければね。」

そう言うのと八夜は初五郎の方を向き相槌を求めた。

初五郎はふん、と鼻息でその求めを払った。

「はは、相変わらず無愛想だね君は。全然変わってない。貴方も苦労なされてるんじゃないやありませんか？あれじゃあ会話が持たないでしょう？」

「いえ、主人はとても真面目に毎日働いておりますから。とても良い夫ですよ。」

吐き気がした。

永久子は猫を被ったりごまかす能力には長けているが嘘をつくこと自体あまり好きではない。

ましてこんな白々しい嘘をついたのは初めてだ。

初五郎の反応を見るのが恐い永久子は急いで話を切り替えた。

「私、^{わたくし}野本さんの本を愛読しましたの。とっても素晴らしい本でしたわ。」

あまり、理学に触れたことはないんですけれど、そんな私でもとても読みやすくて。そう、この前出版なされた本、確かあれは・・・」

「ああ、遺伝学について書いたあの本ですね。驚いたな。女性の方があの本を読みやすいなんて。とても頭の良い方と見える。この前東京でその本の内容について学会で講義してきましたが、ついてこれたのは半分くらいでしたかね。」

永久子の想像以上に野本八夜という男は堂々とした立派な人間だった。

きつと有名な学会で幾つも発表して慣れっこになっているのだろう。自分の意見、主張を綺麗にまとめて次々に発してくる。

「生物学・・・でしたかしら、確かに少し難しい所はありましたけれど、とても面白くて私すぐに詠み終わってしまいました。」

学の心に火がついた永久子は饒舌になり八夜に負けない位話した。気がつけば、招待された客が少しずつ集まり、「あれが八夜だ」「あれが噂の佐原家の・・・」とひそひそ自分達の話題に花を咲かせている事に永久子は気付いた。

その渦の中で学の交換をしている自分に永久子は久しぶりに胸の熱くなる思いがした。

八夜も熱が入ってきたのか、遺伝学について本に載ってない事まで話を切り出してきた。

「メンデルと言う方を本で紹介しましたね？私はその人に強い尊敬の念を抱いていましたね。何と言っても見つけた法則が素晴らしい。初めて彼を知った時には衝撃が走りましたよ。彼こそが遺伝学の祖だ。唯一つ彼の偉大な功績を彼自身が知らずに一生を終えた事だけ無念ですよ。」

「メンデル・・・本の中にたくさん出てきてましたわね。とても素晴らしい方ですって。」

「ええ、そうなんです。本の中では論点がずれるのであまり詳しくは書きませんでした。彼は・・・」

永久子は真剣に話す八夜の目をまっすぐに見つめた。もう既に何人もの人に囲まれているのにも関わらず、それに一切気付かないくらい自分の研究を一生懸命説明しようとする八夜に永久

子は久しぶりに男の熱を見たのだ。

野本八夜・・・この人は・・・

「八夜さん、貴方また周りが見えなくなつてらっしゃるのね？しよ
うのない方！自分の周りにどれだけ人が集まつてらっしゃるかよく
見てみなさいな。ご婦人まで付き合せて。」

二人の間に入ってきたのは永久子と同じくらいの年の女性であつた。
美しくはないが整つた顔立ちできりつとした眉毛が我の強さを表し
てる。

この時代にこれだけはつきり夫をたしなめる妻がいたのに永久子は
驚いた。

ただ、細い目をしたその女性は、育ちが上流でないのか着物を着て
いるにも関わらず大きな歩幅でずかずかと二人の間に割つて入つて
きた。

「貴方の悪い所はそこなんだわ。学問になると何も見えなくなると
こ！本当にあきれてしまうつたら。」

永久子は察した。この女性は・・・

「すまない静枝。^{しずえ} また悪い癖が出た。あー、永久子さん、失礼。妻
の静枝です。」

そう言つて八夜ははじめ悪そうにその女性に手を向けて紹介してき
た。

紹介された女は永久子の表の顔とは全く逆に、澁刺^{はつらつ}と自信のある態
度で永久子の方にその細い目を向けて挨拶をした。

「初めまして。野本八夜の妻の静枝です。八夜の話に付き合つてい

ただいてありがとうございました。」

静枝が持つお転婆で天真爛漫な小娘といった雰囲気は永久子が時々欲する人格そのものだった。

第十七章 「八夜」(後書き)

中々文が繋がらなくてこのままだと短いなあと一生懸命話を練って
いたら過去最高ぐらい字数が多くなってしまいました(汗)

八夜はイメージ的には若い夏目漱石みたいな感じですかね。

あんまりイメージづけちゃいけないのかな？

後どうでも良いけど作者は旧千円札のデザインの方が好きでした。

(本当どうでも良い。)

第十八章 「静枝」(前書き)

八夜の妻・静枝に会った永久子は静枝に対してある感情を抱き・・・

第十八章 「静枝」

二、三十人しかいない広間に甲高い声が響く。

永久子はその声の主をちらりと見る。

そこには大きな声でけらけらと笑う静枝がいた。

野本静枝。

何故彼女はこれほどまでに堂々と振る舞えるのだろっ。

永久子も堂々としてはいるが、艶やかに美しく、それでいて控え目でおしとやかな態度だ。

しかし、静枝の場合は違う。

まるで少年のように身軽ではきはきとした快活な態度である。

肌の色も日に焼けていて黒く、決して美人ではない。痩せすぎなくらい細く、その細い顔に更に細い目がついている。

着物もこれと言って名の知れた高そうなものではない事から身なりへの執着がない事が伺える。

人も集まりそろそろ盛り上がりを見せた頃、永久子は新しく訪れる客に軽く会釈をしながらそんな事ばかりを考えていた。

野本静枝は・・・私の苦手な人間かも知れない。

まだ挨拶だけでろくに言葉も交わしていないが、永久子はそう思っていた。

そう、言ってしまうえば好かないのだ。

あの堂々とした態度も、はつらつとして何の悩みも持っていないさそうなの顔も何故か気に食わない。

「嫌だわあ。だから、言っただけありませんか。私の方が正しいって。」

そう言つて静枝はぽんと重造の肩を叩く。

「おじさまは知らなすぎますわよ。世間は今めまぐるしく変わっているんだから。」

こんなに馴れ馴れしく有名大会社の社長に話しかける事のできる女はきつと静枝くらいだろう。

「おれあ、今んこと何もわかんねえからなあ。いんや、静枝にはかなわん！降参じゃ！」

程よく酒が入り顔を真っ赤にしながらげらげら笑う重造の口元で金歯が何本も眩しく光る。

二人はまるで親子の様に楽しそうに話を広げている。

その二人の周りを囲むようにして人が少しずつ集まっていた。

それを何事もないような顔で見つめる永久子の顔は冷静そのものだ。

永久子は本来芯のある女だ。

自分の考えが正しいと思えば、相手を負かすまでその口で正論を述べる。

決して今の時代の女人の様に、男に死ぬまで付き従う従順な性格ではない。

だが、富田家に嫁ぎ、その凛々しい性格は奥深く身を潜めてしまった。

初五郎に組み敷かれ、家の重圧に潰されいつしか永久子は見た目通りのただ大人しそうな美しいだけの何も知らない奥様となっていたのだ。

それに気付かず、気付こうともせず暮らしていた永久子の目の前に今その全てを突き付けるように静枝がいる。

その静枝の姿の何と輝かしい事だろう。

特に何が秀でているわけでもないのにこの煌めきは一体どこから産まれてくるのか。

もし、富田家に嫁がなければこうはならなかったのだろうか？

いや、佐原の家に生まれなければこんな事にはならなかったかもしれない。

昔のように、あの幼い自分のままでいられたならどんなに楽しく暮らせただろう・・・

私もああなるはずだったなど今思っても仕方のない事だとわかっていても頭の中を回る悲しみの渦は消え去らない。

地位も名誉も美しさも全て自分は持っているはずだ。

だが、その全てが外側にあるものでしかない。

自分の内側はどうだろう。この白く美しく光る皮を剥けば、どろどろと流れる血と肉の向こうにあるのはきつと暗く空虚なものなのだろう。

それがわかってしまった自分の何と悲しい事か。何と空しい事か。

静枝の内側にあるものは何なのだろう？内から出てくるあの本当の笑顔を作っているものは何なのだろう？

永久子は激しい嫉妬に、妬みにそして悲しみに包まれた。

自分の全てが間違っで生まれてきたのだと、育ってしまったのだと思ふと急に涙が湧きそうになった。

「永久子さん？」

そう言っでそつと背中に触れた相手は八夜だった。

「御気分でもお悪いですか？さつきからずっと遠くを見ていますね。」

八夜は永久子にそつと水の入ったグラスを差し出した。

「いいえ、気になさらないで・・・酔ってるわけではありませんの。」

永久子はそう言いながら八夜の差し出したグラスの水を断った。

「でも、具合が悪そうだ。貴方そんなに顔も青白いじゃありませんか。少し休まれた方が良いでしょう。」

八夜は最初に話をした時よりも何倍も優しい声でそう言った。

「心配していただいて有難うございます。でも私^{わたくし}元々このような顔色ですわ。あまり体も丈夫ではありませんから。でも気にしないで下さいね。いつもこうですから。」

そう言つて永久子はふふつと笑った。もちろん作り笑いだ。

その顔を見て八夜はやや深刻そうな顔をした後急に永久子の手を掴み、部屋の端の椅子へと連れて行った。

その手は熱く、強引で何故か永久子の胸は一つ高鳴った。

「八夜さん？どうなさったの？」

驚いた永久子は思わず八夜に話し掛ける。

「どうぞ座して下さい。やはり貴方は無理してらっしゃる。元々体が弱いなら尚更休まれた方が良いでしょう。」

そう言つて八夜は永久子を椅子へと座らせた。
やや強引に座らされた永久子は驚きながら八夜の顔を見上げる。
その瞬間心配そうな顔で此方を見下ろす八夜と目が合った。

「・・・有難うございます。」

間の抜けたような声で永久子は感謝の言葉を口にした。

八夜は永久子を見たままその視線をそらさない。

八夜は消えそうな位小さな声で一言ある言葉を口にしたのを永久子は聞き逃さなかった。

「・・・美しい。」

永久子の胸の高鳴りは一つ二つと増えていく。
その高鳴りは速まり止む事を知らない。

永久子と八夜はずっとお互いを見つめ続けていた。

第十八章 「静枝」(後書き)

また更新が遅れてしまい大変申し訳ありません。

もう飽きてしまった読者の方もいらっしやるかもしれません

学生の身なので試験に追われてる間は更新もかなり滞ってしまう事

ご理解頂けたら嬉しいです。(何であんなに試験が多いんだろう！)

今年までに後一話くらい更新できたらと思っています。

来年はもう少しテンポ良く更新できるよう頑張ります。

見てくださってる読者の方々に感謝です。

本当に有難うございます。

そして、永久子と誰かさんが意外な展開になってますね 他人事。

第十九章 「回想」(前書き)

互いに見詰め合う八夜と永久子。
それを見た静枝は

第十九章 「回想」

一番最初の夫はどんな名前だっただろうか……

もうそれさえも忘れてしまった。

まだ、何年と昔の事でもないのに人は興味がなくなるとこれほどまでに綺麗さっぱり思い出せなくなるものなのだろうか？

父親に無理矢理会わされた初めての結婚相手は全てに興味の失せた男だった。

永久子の美しさも人格も全てがその視界に入らずただ1日中ぼんやり窓の外を眺めているだけの日々をずっと送っていた事だけが記憶に残る。

お互いろくに会話もせず一日が過ぎていく。そんな事も珍しくはなかった。

そこそこの名が知れた裕福な家の次男坊だったが、生まれつきお頭つむに病が巣くっているらしく自分の世界に籠りきりの夫だった。

夫が家にいると言うのに妻が外で遊ぶわけにもいかず、家でやる家事と言えば二人分の食事と洗濯くらいだった。

気付けばどちらが言い出したか離縁となっていた。

家に戻ってきた事を父に激しく叱咤され、鬱々と落ち込でいた永久子の前に現れたのが二番目の夫だった。

その夫の優しさに、凜々しさに永久子は恋に落ちすぐに結ばれた。

永久子は初めての恋の甘さに、情事の快樂に触れ夢中になっていた。そのすぐ後に奈落のそこに突き落とされるとも知らずに。

そして今の夫初五郎との生活は……絶望と隣り合わせだ。

「・・・さん、永久子さん？」

永久子のはつと我に振り返られた方を見上げた。

「やはりかなり具合が悪そうだ。医者と呼ばれた方がいいかもしれない。」

そこには心配そうな顔で此方を見る八夜が立っていた。どれくらいの時間ばうつと過ごしていたのだろう。そして何故過去に還っていたのだろう？

「いいえ、大丈夫ですわ。ちょっと気を取られていて・・・医者など結構ですから。」

「そうですか。だが、少し休まれた方がいい。菅野さんに部屋を用意させましょうか？」

八夜はまたグラスの水を差し出しそう言った。

永久子は感謝の言葉を述べ、今度はグラスを手についた。

そう・・・今まで私の上を通った男達・・・私を幸せにする事ができなかつた男達。

私が幸せにできなかつた男達。その過去を思い出した。

八夜はきつと相手にしてはいけない男なのだ。

妻もいるし、富田家との関わりも深い。胸を高鳴らせてはいけない相手なのだ。

きつとその事を分からせるために、過去の回想が起こったに違いない。

いけない。また、この様な淡い感情に惑わされてはいけない。

「いいえ、本当に大丈夫ですよ。」

グラスの水を受け取った永久子は、その水を一口口に含む。
それを見ながら八夜がふと言葉を発した。

「影に咲く 百合の花の香 香る時 散りに耐えて 鬱々と」

永久子はびっくりしてグラスを落しそうになった。

「まあ・・・八夜さん・・・詩をお詠みになるの？」

「少し嗜^{たしな}んでいるだけです。普段は学者ですからね。」

永久子は急に嬉しさで舞い上がる様な気持ちになった。
自分と同じ様に詩を詠む人間など富田家の屋敷にはいなかったからだ。

「私^{わたくし}も・・・私^{わたくし}も詩を詠みますの。」

「ええ、知っていますよ。詩心を見ました。」

「まあ、ご存知でらっしゃるの？」

永久子はすっかり興奮して少女の様に浮かれた声を出した。

「ええ。良く知っています。ははは・・・」

「・・・？ 私^{わたくし}、何かおかしい事言ってしまったかしら？」

「いいえ、失礼。ただ、先程までとても落ちついてらしたのに、詩の事になるとすっかり可愛らしくなってしまうわれたから。本当に詩がお好きなんですね。」

「まあ、私^{わたくし}つたら・・・」

永久子は顔が紅くなるのを感じた。
いけない・・・こんな事で動揺などしては・・・

「・・・さっきの言葉、聞こえてしまいましたか？」

八夜は少し声を小さくした。八夜の真剣な眼差しが永久子を見つめる。

永久子はまた胸が高鳴るのを感じた。

「・・・さっき・・・？」

「はい、私がさっき言った言葉です。」

永久子は先程八夜が発した言葉を思い出した。

「・・・美しい」

確かに八夜はそう言った

永久子に向かつてはつきりと。

どう返せばいいのだろうか？八夜はもしかしたら自分の事を・・・

「まあまあ私がいるというのに八夜さんたら！離れてくださいな！」

急に割って入ってきたのは静枝だった。

「随分と仲がお宜しい事。私が話し込んでる間にとても仲良くなれたようね。」

静枝は機嫌をひどく損なつた様で皮肉たつぷりに八夜を睨みつけた。思つてゐる事を隠そうともしない所を見ると静枝は本当に裏表のない性格らしい。

「違つんだ静枝。永久子さんは氣分を悪くされていてね。丁度今、少し休んだ方がいいんじゃないかと話していた所なんだよ。それより君の方こそ失礼じゃないか。永久子さんは富田の家の方だよ。それなのに少し挨拶しただけでどこかへ消えてしまつて。」

「あら・・・そうね。うつかりしてたわ。ごめんなさいね。」

静枝は本当に忘れていた様にすつとんきょうな声で返事をした。

「ごめんなさいね永久子さん。私つてこういう性格なの。何時も周りが見えてないつて夫に怒られるのよ。昔から直そうとはしているんだけど。」

静枝は叱られた子供そつくりにくろつと舌を出した。

永久子は何だか急に静枝の事を親しく感じられた。

もしかしたら静枝は裏表がない分他の女人よりも楽な付き合いが出来るかもしれない。

「いいえ、私の方こそ先程はろくな挨拶も出来なくて失礼致しました。」

永久子が丁寧な返事をするに静枝はまたけけらと笑い出し、永久

子の肩を軽くぽんつと叩いた。

「嫌だわあ、永久子さんたら！私達同い年でしょ？もつと崩しまし
ようよ。私の事は静枝で良いから。ね？」

先程までひどく静枝を警戒していたのに永久子はふと安心する自分
に気付く。

「ええ、よろしくね。静枝さん。」

「うふふ。ねえ、それより私貴方に聞きたいことがあるのよ。永久
子さん詩心に詩を載せてらっしゃるでしょう？」

静枝は興味津々と言った感じで永久子の顔を覗き込んできた。

「ええ、ほんの少しだけですけれど載せて頂いてますわ。先程八夜
さんにも聞かれました。」

「まあ！まあまあ！私いつも詩心を愛読してますのよ！何度も詩も
送って・・・もちろん載せてもらった事なんて一度もないですけれ
ど。」

何て素晴らしいのかしら・・・羨ましい！」

静枝は心の底から感激しているといった風に元々大きい声を更に荒
げた。

「ねえ、良かったら私とお友達になって下さらない？ね？私達家も
近いし。詩について語りましょうよ。そうだわ！今度一緒に私の家
で詩を詠みましょう！永久子さんとは是非詩を詠んでみたいわ。何せ
詩心に載るくらいですもの。ああ、楽しみだわ！ね！そうしましょ

う！」

うきうきとしながら静枝は永久子の白く細い手をぎゅっと強く握り勢い良く上に掲げた。

今までそんな事をされた事のない永久子はびっくりしながら返事をする。

「ええ。わたくし私で良ければいつでもお伺いしますわ。」

「ああ良かった！私本当に楽しみだわ。」

気付けば先程の気分が落ち、椅子で落ち着いているのがやっとだっただ体はしっかりと立ち上がりいつもの様に真っ直ぐと背筋を伸ばしている。

永久子はこちらに来て初めて良い意味で付き合える人間が出来るかもしれないと感じた。

第十九章 「回想」(後書き)

ぎりぎり今年に間に合いました；

本当にぎりぎり・・・(汗)

今年は永久子という女性が生まれて、それを自分なりに書く事ができて良い年だったと思います。

まだまだ下手な文章で読みにくいとは思いますが、努力していくので応援宜しくお願いします！

今年は大変お世話になりました。
また来年も宜しくお願いします。
皆様良いお年を！

第二十章 「訪問」 (前書き)

永久子の住む富田家の家にある日突然静枝がやってきて

第二十章 「訪問」

夏の暑さが盛りを終える。

今年はいくらか乾いている方だったが、今日はその夏の残りか特に蒸す。

梅が汗を拭きながら永久子の食事の片づけをしていると、玄関で人が呼ぶのが聞こえた。

「ごめんくださいな。永久子さんいらっしやるー？」

高く大きな声で叫んだ女は静枝だった。

「あら、まあまあようこそ・・・」

慌てて迎えに出た梅は突然の静枝の訪問に軽く会釈をした。

「あらあ、梅さんじゃあないの。こんにちは！お久し振りねえ。お元気だったかしら？」

静枝の声は更に甲高くなる。

きんきん声で挨拶した後静枝はどさつと玄関に腰を下ろした。

「お久し振りでございあす。こっちはまあまあですあ。静枝様も相変わらずお転婆な様で。」

梅がくすつと含み笑った。

「いやあだ、梅さんたら！私これでもおしとやかになった方よ？毎日注意ばかりされてるけれど。」

「はて？どこがでしょう？昔とさほど変わらんようにも見えますけれど？」

冗談を言う梅の肩を静枝がぽんと叩く。

「もう！相変わらず梅さんは私を子供みたいに扱ったから！私もお二十八よ？うふふ。それにね。私今日は永久子さんに会いにきたのよ。いらっしやるかしら？」

「奥様に？奥様なら今丁度お食事御済みになったところですよ。少々お待ち下しあ。」

梅はぱたぱたと永久子を迎えに行った。

「・・・秋月の・・・ふふ、これじゃあ可笑しいわね。何時頃書かれたのかしら？まだ夏を過ぎてもないのに。」

永久子はその美しく細い指で一枚の手紙をなぞった。

腹も満腹になり、心地よいまどろみの中で永久子は伏し目がちにその紙を机の上に置いた。

「失礼します。」

梅の声を聞き永久子はすぐに振り向く。

「どうぞ。入って頂戴。」

「失礼します。お邪魔しましたか？」

「いいえ、丁度今手紙を片していたとこよ。ほら、見て頂戴この手紙の数。全て詩心を読んだ方からの私^{わたくし}への手紙よ。すごいでしょう？いつの間にかこんなに増えてしまったの。」

永久子は両手で抱えきれないくらいの手紙を持って梅に見せた。

「中には自分で詠んだ詩を私^{わたくし}に送ってくる人もいるわ。でも見て頂戴。今日届いたものよ。秋月の夜を詠んでるんですって。どうして送ってきたのかしらね？まだ秋の月を詠むには早すぎるのに。ふふ・・・」

永久子は詩心の話ができて上機嫌だ。

「はあ。私は詩の事はよくわからなありますが。何でこんな暑い日に送ってきたんでしょうかねえ？」

「ふふ、そうでしょう？・・・それで、梅。何か用事かしら？」

「ああ、すいあせん。すっかり忘れてました。実は今玄関の方に静枝さんが来てらっさるんですよ。」

「静枝さんが？」

永久子は両手に抱えた手紙を何通か畳に落としてしまった。

野本静枝・・・本当に来たのだ。

それにしても急な話だ。あの時会ってからまだそんなに経っていないのに。早速か。

「そう。じゃあ上がっていただいた方が良いわね。早速お出迎えし

なくては。どうぞ向ここの部屋にお通しして。」

「わかりあした。」

しかし、こんなにすぐに来るとは静枝は本当に行動的だ。

そんな事を思いながらひんやりとした廊下を永久子は音もなく歩き静枝の方に向かう。

永久子が玄関に行くところには直接床に座り、着物から出ている足を暇そうにぶらぶらさせながら待つ静枝がいた。

まるで女中が着る様な赤茶色の地味な着物を着ている。帯も黄土色を暗くしたような四通柄で、ただ線が入っているだけだ。

何も用事もなかった家にいるだけの自分でさえ淡い藤色の無地の着物に百合のお太鼓柄の帯を締めているというのに静枝は一体何時の時代の女なのだろう。それとも地方の女人は皆この程度なのだろうか。

「こんにちは、静枝さん。」

急に呼ばれてびっくりしたのか静枝は飛び上がりながら後ろを振り返った。

「あらあ！永久子さん！ようやく会えたわねえ。梅さんが遅いから待つちゃったわあ。」

細い目がにこつと笑ったのでまるで線の様だ。

「こんにちは静枝さん。お出迎えが遅くなってしまつてごめんなさいね。そんな所で待たせてしまつて。」
どうぞあがつて下さいな。」

永久子は申し訳ないと静枝にお辞儀をした。

「ああ、良いのよわざわざ。そんな事より今から私の家に来ませんか？お茶もお菓子も用意するわ。ね？今から私の家で詩でも読みましようよ。」

「今から？」

永久子はあまりの急な誘いに驚いた。

「そう、今からよ。駄目かしら？」

「駄目ではないけれど・・・随分急な話なのね。」

「ごめんなさいね。私思い立ったらすぐに動いちゃうの。じゃあ行きましようか。」

静枝は永久子のはつきり返事をしない内にさつさと腰をあげ外に出ていってしまった。

「すいあせん。静枝さんは昔からああ落ち着きがないもので。治せつち周りからいつも言われてるんですが。」

梅は苦笑いを浮かべながら言った。

「仲が良いのね静枝さんと。良く知っているの？」

「ええまあ。でも最近是用事がある時に少し話すだけですあ。静枝さんは野本家に嫁ぐ前からうちと繋がつとりましてねえ。ちいちい頃から重様に娘の様によろ可愛がられとりやした。私も暇があれば

ままごとの相手させられましたなあ。ただ、初五郎様と仲が悪くて、だから家の方にや寄りつかないんであすよ。」

そつなのか。永久子は静枝と梅の親しい理由を知って納得した。

「静枝さんどこ行きなさるんですか？御支度した方がよろしいですか？」

「ええ、そうね。せつかく誘って頂いたしお邪魔してきます。向ここの家に何か持っていきたいから準備して頂戴。静枝さんが待つてらっしゃるから早くお願いよ。」

「かしこまりやした。」

永久子は簡単には身支度を済ませ外に出た。そこには静枝が大きな欠伸をしながら気だるそうに立っていた。

「待ちくたびれちゃったわ永久子さん。」

今の欠伸のせいでうるんだ目を擦りながら静枝は言った。

「ごめんなさいね。支度してたものだから。」

静枝が大股でずんずん進むので、永久子は少し小走りになりながら返事を返す。

永久子が追い付くと静枝は手を後ろに組みながらくると横を向き、永久子の顔を覗き込む様に見た。その仕草はまるで女学生の様だ。

「私の家ってここからとっても近いのよ。すぐ着くの。今日は八夜

さんも家にいるはずだからちょっとお邪魔かもね。でもそうだね、八夜さんも詩に興味があるみたいだから三人で一緒に遊びましょうか？」

下駄の音をからからと大きく立てながら静枝はますます目を細くしながら笑った。

同じ町に住む同い年の女。

これ程までに自由奔放に暮らしている静枝が永久子には別の世界の人間の様に思えた。

第二十章 「訪問」(後書き)

ようやく試験が終わったのでまた少しずつ更新しようと思います。
よろしく願います。

第二十一章 「企み」(前書き)

静枝の家に招待された永久子。

そこには静枝の夫である八夜もいて

第二十一章 「企み」

「さあどうぞ、ここが私の家なの。」

永久子の住む家から本当に少し行つた所が静枝の家だった。

一見質素に見えるがちゃんと年月を重ねた佇まいと風格を持つ昔ながらの家屋といった感じた。

瓦が何枚もしかれた屋根にはびっしりと苔が生え、その屋根を支えるしつかりとした柱はかなり太く、丁寧に作られているのが窺える。^{みきな}八夜の父の幹成の代からの家なのだろう。

この家の持つ重厚な雰囲気はまだ建てられてから日が浅い富田の家にはないものだ。

富田の家にはさすがに及ばないものの、敷地の広さも大きめの母屋の他に何軒かの家が連なっていて、かなりの広さに見える。

遠くに見える庭では池の鯉に餌をやる女中の姿が見えた。

こんなに広い家がこんなに近くにあったのか。

永久子が外に出る時の用事と言えば、初五郎の妻として出席する会食や重造の会社の繋がりで出なければならぬ行事が大半を占めていたため、永久子はほとんどこの町を散策した事がなかった。

特に静枝の家の辺りは一度も出掛けたことがない。

永久子は自分は本当に富田家と言う籠の中に籠りつきりだったのだと思った。

「さあさあ遠慮せずどうぞ上がって頂戴。今お茶の支度をさせるわ。」

静枝は下駄を無造作に脱ぎ捨て、出迎えた女中にお茶を用意するよう命令した。

「履物はここでもよろしいかしら？」

永久子は静枝が脱ぎ散らかした分も一緒に片付けながら静枝に聞いた。

「あら！ごめんなさい私ったら。ええ、そこで大丈夫よ。ありがとう。さ、どうぞ。」

静枝は申し訳なさそうに頭を掻きながらずかすかと廊下を進んでいく。

静枝は子供の様に落ち着きがなく、お転婆な上にどうやらあまり起こつてゐる物事に大して気を止めることができないらしい。

「待ちなさい、静枝！一体君は何なんだ、そんな事をさせて。お客様に脱いだものを片付けさせるなんて失礼にも程があるじゃないか。」

少し怒つた口調で静枝を叱咤した声の主は八夜だった。

「よりにもよつて永久さんにそんな事をさせるなんてどういふつもりなんだい？それにそんな着物で富田の家に行ったなんて……ああ、もう君は本当に手が掛かるな。」

八夜はふうつと溜息をつき、半ば厭あきれながら静枝を窘たしなめた。怒られた静枝は子供の様に、ばつが悪そうにごめんなさいと謝つた。

「すいません永久子さん、うちの静枝は本当に礼儀というか、行儀が悪いんです。昔から直せと叱っているんですが……どうぞ、こちらに。本当に失礼しました。」

「いいえ、どうぞ気になさらないで。とても賑やかなお家うちなんですね。羨ましいですわ。」

その言葉は永久子の本心だった。

お互い気を遣わずに言い合っているこの二人の関係は理想の夫婦そのものだ。

これだけの地位の高い男性であっても、こんなにも屈託のない夫でいられるのだ。

永久子は改めてあの家に巣くう重苦しい空気が初五郎によって作り出されているものなのだと感じた。

「静枝の急な誘いに付き合って頂いて本当に感謝しています。古くて何もない家ですがどうぞゆっくりしていつて下さい。」

八夜はそう言うのと永久子を客間に案内した。

今日の八夜の服装はこないだあった時とは違い、白いシャツに灰色のズボンを履いている。

この暑さのためか胸元のボタンを開けて前をはだけさせている。八夜が歩きながら腕まくりをする。

捲まったシャツから伸びる腕は意外に逞たくましく、暑さのせいでやや汗ばんでいた。

「こちらこそすいません、こんな急にお邪魔してしまって・・・何かお仕事をされてらしたんでしょう？」

永久子は八夜の背中に向かってそう言った。

「いえ、ちょっと書棚の整理をね。家ではいつもそうです。ずっと書斎に籠りつきりだ。学会で発表することに増えていく資料に手が

追いつかない状態ですよ。」

ははつと笑いながら頭を掻く八夜の手を永久子はじつと見つめた。学者にしては細くないその身体を長く見つめる自分に気付いた永久子は赤らめた頬を俯いて隠した。

「さ、どうぞ。今お茶を煎れさせていますから。全く、静枝はどこにいったんだろう。いつもああで本当に困っているんですよ。」

永久子さんの様な妻だったら安心して家を任せられるんですがね。」

髭に隠れた口元がふふつと笑ったのを永久子は見た。

八夜の髪がもつと黒くて、髭を剃ったならきつと永久子と同年くらいの顔になるだろう。

そのくらい八夜の顔の笑った顔は幼く見えた。

「いいえ、私^{わたくし}なんてただ嫁いだけで何の役にも……いつも詩を詠んでいるだけですもの。周りから見たら使えぬ嫁に見えるでしょうね。」

「そんな事ありませんよ。あなたは美しい。それだけでも素晴らしい事なのにあの詩心に詩を載せているなんてすごい才能ですよ。静枝にも見習ってほしいものだ。……私もそんな妻が欲しかったですけどね。」

最後にぼそつと言った八夜の一言に永久子は顔を上げた。

その瞬間永久子の方を見つめる八夜と目が合った。

この男はどういう考えなのだろう。

永久子の頭の中にはまだこの前の一言が響いていた。

二人きりでいた時に八夜が言った言葉。

「あなたは美しい。」

あれは、冗談でもお世辞でもなかった。そんな口調ではなかった。まるで気のある相手に告白でもしているかのような甘い言葉……だが、気のせいかもしれないと思った。

あの後静枝が横から入ってきてから八夜は何事もない振りをしていたし、あの後何度か二人で話したが全くその様な雰囲気にならなかったからだ。

もしかしたら八夜もまた永久子の発する美しさに触れて惑わされた一人なのかもしれない。

永久子はその思いあの日の出来事をなかった事とした。しかし、今八夜の話す口調はあの時永久子の胸を高鳴らせた口調そのものだ。

この男はどうしてまたこの様な気のある素振りを見せるのだろう。いけない

永久子は懸命に八夜の言葉の本心を探ろうとする自分を止める。

八夜はいけない。八夜は近すぎる。初五郎だけでなく重造とも繋がっている。

まして、自分はもうこの男の妻と友人となってしまったのだ。

このままこの誘いに乗れば確実に煩わしいものとなる。

この男は駄目なのだ。

前にも自分に言い聞かせたはずなのに込み上げてくる色めきの感情を永久子は必死に抑えた。

もう色恋などくだらないものに惑わされてはいけない。

このまま枯れた人生を送り朽ち果てようとも、甘い蜜の先に暗闇が待つのならこれ以上自分の心を傷つけるような愚かな事はしてはいけないのだ。

永久子は動揺した自分の心を押し戻し、またいつもの仮面を被り八夜に答えた。

「八夜さんたら学者様なのに冗談も仰るのね。きっと私を妻になんかしたら毎日詩を詠むのに付き合わされて飽き飽きしてしまうわ。」

永久子は悪戯っぽく、だが一線を引くように答えた。
その永久子の返事に八夜はすぐに返事をする。

「つれないですね。」

その返事は意外な程あっさりとしていた。
永久子の胸の奥がちくんと痛む。

その後のやり取りは何気ない普通の会話だった。
暫くすると静枝が詩心や筆や紙を持ってやってきた。

「ねーえ、永久子さん。これから一緒に詩を詠みましょうよ。何か同じ題で考えながら。何なら八夜さんもどうぞ。部屋の整理なんかやめちゃって入っていいわよ。ね、永久子さん。いいでしょう？」

静枝は子供が親に甘えるような口調で永久子にそう頼む。

「面白そうだな。僕も上手くはないけれど是非一緒にやってみたいね。何といつても詩心に載る方と一緒に詩を詠めるのだから。」

「ええ、喜んでお願いしますわ。」

それから三人で詩を詠み、題を変えながら次々と詠んでいく。思った通り、静枝はあまり才能がないのか子供の様な詩ばかり詠むしよっちゅう間違えるし時間がかかるので永久子は姉が妹に教えるような気分で詩を一から手ほどきしなければならなかった。だが意外なことに、八夜の方はすつきりとした良い詩を詠みあげていく。

ひねりはないが、永久子が少し助言をするだけですらすらと詩を作っていくので永久子は感心した。

「まあ、驚きましたわ。八夜さんは詩もお出来になるのね。とってもお上手だわ。」

「いえ、見よう見まねですよ。きっと教える師が良いんです。」

そう言つてまた幼い顔がにこつと笑つた。

「あーあ、駄目だわ。今日は調子が悪いったらないわ。全然駄目よ。」

そう言つて静枝は筆を投げて椅子に深く座り込み天井を見上げた。その姿は子供としか言い様がない。

「全く君は。いつもすぐ投げ出すんだよ。教えてもらつてるのにそんな態度は失礼じゃないか。」

そう言つて八夜は次の自分の詩を小声でそつと詠み上げた。

「百合の花　野草近くに　溜息を　漏れる吐息に　我を感じる」

永久子は心臓が止まりそうになった。

静枝は今の詩を全く聞いてなかった様だ。
暇そうに自分の指をいじっている。

永久子は八夜のほうを向く。

八夜の瞳はじつと永久子を捉えたままだ。

永久子の胸は大きく高鳴った。

もし永久子の思った通りの詩ならば

もし永久子を百合の花に例えたならば

八夜はまたも永久子の心を揺さぶろうとしているのだ。

自らの妻の目の前で。

永久子は目を伏せながらまた静枝の方を向く。

夫がこんな大胆な詩を詠んでいるのに何と呑気な態度だろう。

永久子はあきれ返ったと同時に先程消した念が再燃していくのを感じた。

こんな女人にこれだけ魅力のある夫がいるのに何故自分は・・・
自分に多少落ち度があるとしても何故これ程までに違う人生を歩んでいるのだろうか。

美しさも学も自分なりに磨いてきたはずだ。

常に自分を向上させようという精神も未だ衰えてはいない。

それなのに何故一生を共に過ごすべき伴侶に恵まれないのだろうか。

この女人は子供の様にただ遊んでいただけなのに。

永久子に沸々と邪念が沸く。

先程理性で抑えたはずのものが熱を発し愚かな考えに変わる。

永久子は静枝が見てないのを確認し、八夜を見つめて言った。

「素敵な詩なこと・・・八夜さん。」

口元に当てた白い指は色つぼく、動くその口元は隠微なものを感じさせた。

この世の男の大半が堕ちてしまいそうなその瞳は八夜を捕らえて吸い込もうとでもしているかの様だった。

そう、自分の考えている事はこの世の中で決して許されない事だ。だが、愚かと分かっているにも止められない欲望が頭を掻き回す。

もしこの女からこの男を奪ったらどうなるのだろう

第二十一章 「企み」(後書き)

また更新が遅くなりすいません。

休みのはずなのに何故か忙しいです。

何でだろう？

3月後半は家にいないのでそれまでにまた更新したいです。

そして永久子が何やら企んでいるようです・・・

第二十二章 「手紙」(前書き)

静枝に家に行った日から八夜の事が頭を離れない永久子。
そこに八夜から手紙が来て！

第二十二章 「手紙」

ぼうつと窓の外を眺める。もう秋が来る。それとももう来たのかも
しれない。

そんな事を考えながら永久子は先日のお出来事に耽っていた。

そう、八夜の家に行った時のあの出来事だ。

八夜の家で詩を詠んでいる時永久子は心の底から静枝に対して嫉妬
をした。

何の苦勞もせずただのうのと駄々をこねて生きている静枝を妬み、
恨み、羨ましいと思った。

そして同じ態度をとることが許されず毅然^{きぜん}に振舞わねばならない自
分が心底惨めだった。

何故自分だけ

そう思う事がどれ程愚かであるか分かっている。

その思いを態度に出せばああ、何て可哀想な自分なのだと不幸に酔
う薄っぺらな女と同じだ。

だから出せない。出してはいけない。

だが、心の隅に巢食うその哀れな自分は確かに永久子自身である事
も事実だ。

永久子の心には強く気高き精神と打ちのめされ消え入りそうな位弱
い感情が複雑に入り混じっていた。

そして八夜 あの前こそあの日永久子が今までひた隠しにしていた
女の部分を露出させた張本人だ。

あの日永久子は人の妻としてあらざる態度を八夜にとった。

誘惑する様な態度と言葉で八夜を見つめ八夜の誘いにのつたのだ。

八夜の詳しい意図はわからない。

だが、永久子に何か別の感情を抱いていることは確かだ。
友人の妻以外の感情の何かを・・・

そう思うと八夜はやはり危険な男だ。

自分と永久子の立場を理解しているにもかかわらずあの様な態度を取るのだから。

しかし、永久子からはやっぱりやめようか？などと怖気づいた感情は出てこなかった。

八夜は優秀な男だ。静枝の夫にしておくには惜しすぎる。

八夜を選ぶために具体的に何かをしようとはまだ考えられないが、少しぐらいの憂さは晴らしていいのではないか？

そんな疚しい考えが今永久子の頭の中にあつた。

普段の自分であれば決してこんな事は考えないだろう。

しかし、長く富田家の重圧に蝕まれた永久子にとって八夜からの誘惑は暗く重く病みきつた永久子の心を浮き立たせるのに十分だった。

「永久子さん、今大丈夫ですか？」

梅の声だ。

「ええ、大丈夫よ。どうぞ入って頂戴。」

秋になり、着物の色を変えたのだろう。

秋のいちよの葉よりも少し暗めの着物を着ている。

梅は大きい音を立てないように静かに襖を閉め、ある封筒を永久子に見せた。

「失礼しあす。野本八夜様からお手紙です。」

「まあ、八夜さんから？」

噂をすれば、とはこの事だ。

茶色い封筒の中には二枚の手紙が入っていた。

「・・・学会のお誘いだわ」

一枚目は、来月開かれる学会の日程などの詳細が書かれた紙だった。二枚目はその学会で自分が発表する事になったので、時間があれば是非来て欲しいと書かれていた。

「八夜さんが来月学会で発表なさるんですって。もし良ければ私も
つて・・・」
わたくし

「まあ、それはそれは・・・本当に八夜様は勉強熱心な方ですね。」

「そうね、そういえば梅。貴方静枝さんと親しかったのなら八夜さんとも顔見知りなのではなくて？」

「いえいえ私は全くそんな立場であなくて。確かに静枝さんは昔から重様になついてらつたから私も知ってますが。八夜様と静枝さんの結婚はほんの2年ばかり前の話ですし。八夜様のお父様の幹成様は重様と仲が良いんで良く知っておりますがね。昔から八夜様はお忙しい方だったんでこの家にも一度位しか来てねえと思えます。なんで、私も八夜様の事はお顔もあんま良く知らねえんですよ。」

「ああ、そうなの。」

それは都合が良い、と永久子は思った。

この屋敷に八夜は滅多に來ないなら、初五郎と接触する機会も少ないだろう。

「せっかくのお誘いだし行ってみようかしら。難しそうな話かもしれないけれど色々知っておくのは良い事だから。」

「そうであるね。永久子さんは勉強熱心じゃから。」

そう言つて梅は夕飯の支度に外に出て行つた。

梅が出て行つた部屋で永久子は、梅がいる間ずっと指で隠していた文の一部を見た。

二枚目の紙の一番下に男の人の字らしいはつきりとした字で書かれたほんの一行の文。

そこには詩が書かれていた。

「育つ秋　いちよう葉落ちる　かの時に　再び見ゆる　夏の残り香」

永久子は一目でこの詩の意味を理解した。

この手紙は、あの乾いた夏に会つた日からの再会を望む八夜の手紙だった。

第二十二章 「手紙」(後書き)

半年以上も更新を放置していてすいませんでした；

しかもそのわりに話進んでない；；

前の章のミスもあらかた直したし、ばちばちちゃんと更新していい
うかと思っています。

よろしく願います！

第二十三章 「再会」(前書き)

八夜に招待され、八夜の学会へと出向く永久子だったが

第二十三章 「再会」

「それではいつてらっしゃいませ。」

玄関で下駄を履く永久子に瑠璃が薄手のコートを差し出した。

「有難う。気が利くのね。」

「もう秋になりましたから。夜は冷えると思ひまして。」

につこりと可愛い笑顔向けながら瑠璃が言った。

「そうね、今日は遅くなるかもしれないから何か羽織ったほうがいいわね。また風邪でもこじらせたら大変だから。」

永久子は以前初五郎に裸のまま置き去りにされ風邪で寝込んだ事を忘れてはいなかった。その事を少し皮肉っていつてみたがまあ瑠璃にはわからないだろう。

そう思いながら瑠璃の方を向くと何故か少し険しい顔をしてうつ向いている。

「どうかして？瑠璃。」

「いいえ、奥様。何も。いつてらっしゃいませ。」

何だろうか？いつもにこにこ笑う瑠璃のあの様な顔は初めて見る。

何か憂い事でもあるのだろうか？

そう考えながら永久子は駅に向かった。

今日は八夜の招待で八夜が講演を行う学会に参加する事になっている。

富田家の人間として失礼のないように・・・というのは自分自身本当に聞き飽きた文句なのだが、聞いた話では地方で開かれる学会とはいえかなり大きなものらしく、永久子はいつも以上に気合いを入れて身支度を整えた。

髪も着物もどこを見ても非の打ちどころがない。

白くつややかな肌に赤い口紅が良く映え、大きな目を縁取るまつげは永久子の顔を更に華やかにさせる。

よし、今日も自分は完璧だ。そう言い聞かせて家の外に出た。

遠慮がちに小声で挨拶をしてくる近所の婦人に永久子は軽く会釈で挨拶を返す。

びつくりしてまた深々とお辞儀を返す婦人の反応を見て、永久子は今日も自分はちゃんと「貴婦人」を演じられていることに満足と安堵感を覚えた。

そのせいで、先程の瑠璃の事はすっかり頭の中から消え去っていた。

「さあ奥様、どうぞ。」

永久子を馬車へと促した男は喜一だった。

喜一は、永久子が初めてこの家にやってきた時に駅まで迎えに来た重造の使用人だ。

「ありがとう、喜一。」

永久子が感謝の言葉をかけると、喜一は一瞬永久子の顔を見た後驚いて目を大きく開けたまま深々とお辞儀をしながら馬車のドアを開けた。

まだ緑生い茂る季節に会った時と同じ様に、喜一は鼻の頭にたつぷりと汗をかいていた。

少し厚めのコートを着させられているせいもあるかもしれないが、尋常な量ではない。

深くお辞儀をしているせいで、鼻の頭に溜まった汗が今にも地面に落ちそうだ。

どうやらまた永久子を前にして緊張してしまっているらしい。

永久子は何だか急に可笑しくなって、お辞儀したままの喜一の肩にそっと手を掛け軽く叩きながら言った。

「そんなにかしこまらなくてもいいのよ、喜一。今日は遅くなりま
す。家の事はお願ひね。」

そう言つて、微笑んだ永久子を見て喜一はその痩せた顔についてる口をぽかんと開けたままドアを閉めて見送った。

喜一は見送つてる間もずっと口を開けたままだった。

会場に着くと、そこには普段では見る事のできない光景が広がっていた。

どこを向いても、男性ばかりだ。

中年の男性ばかりが、わらわらと歩き書類を見たり互いに話し合いながら永久子の乗る馬車の前を通り過ぎていく。

永久子が馬車から降りその光景を見回すと、周りの男性の動きが止まり急に静かになった。

どうしたのだろうか？さっきまで皆忙しそうにしていたのに。

きょとんとした顔で辺りを見回すと、どうやら全員の視線は永久子に向いているらしい。

無理もない、これから学を交換し合おうとしていたその真ん中に美女が現れたのだ。

その美しさに多くの者が振り返り、永久子を見る人間の目はどこか落ち着きがない。

私を見ている・・・？

永久子は急に恥ずかしくなり、もう一度自分の着物を見直した。ちゃんとこの場にふさわしい格好で自分を飾れているだろうか？

「やあ、永久子さん。来て下さったんですね。」

「八夜さん。」

会場の入り口に着くなり、永久子はすぐに八夜に会えた。

学会用に新調したのか、濃い灰色のスーツを着ている。パリッと糊の利いた白いワイシャツと紺色のネクタイが良く似合っている。ネクタイについている銀色のネクタイピンもセンスが良い。

静枝の選んだものだろうか？それとも自分でつけたのだろうか？確率が低い話だが、一瞬八夜のネクタイを締めて身支度を整える静枝の姿が浮かんで永久子は何故か胸がちくんとした。

「良かった。来てくれないかと心配しながら待っていたんですよ。」

「まあ、お忙しいのに・・・」

「いいえ、大丈夫ですよ。僕の出番はずっと後ですからね。どうせ最初は退屈なおじい様方の演説から始まるんですから。」

八夜が小声で耳打ちをした。

「まあ、八夜さんたら」

永久子は笑いながら答える。

「ねえ、八夜さん。今日の私わたくしおかしくないかしら？さっきから皆さんがこちらを見ている様な気がして・・・どこか変なのかしら？」

「ああ、当然ですよ。こんな男ばかりの会にあなたの様な美人が来て皆目を丸くしてるんです。でもこんなに目立つなんて隣にいる僕まで恥ずかしいや。」

頭を掻きながら八夜は照れる様に顔を伏せた。

「そうでしたの。一応気をつけてはきたのだけど・・・私わたくし、場にふさわしくない格好をしているのではなくて？」

「とんでもない！皆（皆）みと見惚れているんです。貴方が美しいから・・・」

そう言つて八夜は永久子の手を握った。

「は、八夜さん・・・」

永久子は頬を赤らめた。いくらなんでもこれはまずいのではないかいくら学会の場で永久子の人妻である事を知らない者ばかりとはいえさすがに八夜が既婚者だと言う事くらいは知っているだろう。もし八夜の妻が目の前で手を握っている美しく艶やかな永久子ではなく、子供の様にはしゃぎまわり駄々をこねる色黒の静枝と知ってる

人間に見られているならこの光景は少しばかりまずい。

周りを見てみると案の定こちらをみるたくさんの視線が、八夜に握られている永久子の右手に集中している。

「八夜さん、いけませんわ、周りが・・・」

「周りは何ですって？さあ、これが今日の僕の演目ってやつですよ。まだまだ時間はありますから見てやって下さい。」

そう言つて永久子の右手にぽんと握らせたのは八夜が今日講演する内容が書かれた紙だった。

永久子が八夜の顔を見上げると、八夜は悪戯っぽい笑みを浮かべて手を離れた。

「それでは僕はまた少し挨拶回りをしてきます。またすぐ戻ってくるので会場を見学されては？たまにはこんな男ばかりの光景も面白いと思いますよ。若くないのが残念なところではあるけれど。」

くすくすと子供っぽい笑みを浮かべながら八夜は向こうの部屋へ行つてしまった。

はめられた・・・永久子は頬の赤みがとれぬまま立ちすくむ。

八夜は永久子をからかったのだ。

いっぱい食わされたとむくれる永久子は渡された紙を見る振りをしながら顔を隠した。

（何が見学されては？よ、全く冗談が過ぎるわ）

ブツブツと心の中で文句を言いながら永久子はふと紙越しに会場を

見た。

その瞬間会場の端に佇む一人の女に目が行った。

（私以外に・・・女性が・・・？）

永久子の視線に気付いたのか女はこちらを向いた。

第二十三章 「再会」(後書き)

気付いたら前回の更新からだいぶ期間空いてました……すいません；

書きたい時に書けばいいや〜とか思ってたらこんなになってしまつて……

次回はもう少し早く更新できるよう頑張ります……よろしくお願いしますm(――)m

第二十四章 「弥栄子」(前書き)

八夜に招待されて学会を訪れた永久子。そこには「弥栄子」という女性がいて -

第二十四章 「弥栄子」

男だけ。しかも若い男などほとんどいないその場所にその女性は立っていた。

何て色の白い女人ひとだろう。

その女性に対する永久子の第一印象はそうだった。

永久子と同じ位白い肌のその女性は永久子の視線に気付いてこちらを向いた。

かなり小顔でとても可愛らしい顔をしている。おっとりした眉とつぶらな瞳が印象的だ。

年は永久子より下に見える。瑠璃ぐらいだろうか？

背はそれ程小さいわけでもないのにあまりにか細いのでとても儚くそして幼く見えた。

落ち着いたたたずまいから女学生と言うことはないかもしれないがこの場所にはかなり不釣り合いだった。

もしかしたら自分より浮いてるかもしれないと思いながら永久子は軽く会釈をした。

女性も向こうから会釈を仕返す。

「誰かいましたか？」

声のする方を向くと戻ってきた八夜だった。

「いえ、あそこに女性がいらっしやるから珍しいと思って。」

「ああ、弥栄子さんじゃないか。」

「ご存知なの？」

「ええ、知り合いなんです。弥栄子さん！」

その女性は八夜の呼ぶ声に気付き今度はすぐに振り返り真っ直ぐにこちらに向かつてくる。

永久子の百合の様な魅力とはまた違って弥栄子と言う女性は鈴欄の様な可憐な雰囲気を持っていた。

「来ていたんですね、こちらは富田永久子さん。あの富田の家の方ですよ。永久子さん、こちらは相模弥栄子さん。さがみやえこ私の友人です。」

「永久子です。初めまして。」

「相模弥栄子です。お初にお目にかかれて光栄ですわ。どうぞよろしく願いますね。」

そう言うのにこりと笑う弥栄子に永久子は違和感を感じた。

妙に落ち着いている。もしかしたら永久子が思っているよりもっと年が上なのかもしれない。

「失礼ですが、お年を聞いても？」

「私^{わたくし}、今年で三十になります。」

「まあ、一つ違いでいらしたのね。しかも年上の方だったなんて失礼致しました。」

やはりこれだけ落ち着いた話し方が出来るのは年上だったからなのだ。しかし驚いた。女学生とはいかないまでも二十歳そこそこの女性と違っていたのに。まさか自分よりも年上だったとは。

「気になさらないで下さいね。良く言われますの。私も永久子さんの様な素敵な大人の女性に見られる様努力はしているのですけどこの通り生まれつきの童顔で自分でも恥ずかしいくらいで。主人にもからかわれますし。」

「弥栄子さんの旦那さんは海軍の将校なんですよ。あの人の前に出ると学会で発表するよりも緊張してしまうんです。」

「ふふ、やだわ八夜さんたら。私^{わたくし}の夫はそんな恐い方ではなくてよ。」

笑う姿も何と上品で落ち着いているのだろう。これだけ可愛らしく大人な振る舞いの出来る女性が周りにいながら八夜はどうして静枝なんかと結婚したのか永久子は改めて不思議に思った。

「それに私の主人と八夜さんが会ったのなんて数える位じゃなくて？いつも冗談ばかりおっしゃるんだから。」

「だって君の旦那さんはいつも仕事で海外ばかり行っているからさ。会いたくても会えないんだよ。酷い旦那さんだ、こんな美女を残して仕事に没頭なんて。」

永久子は顔には出なかったが小さくむくれた。

堅物の学者で自分の妻にも興味がなさそうな振りをしてちゃんと相手になる女性が他所よそにいるではないか。どこまで深い仲なのかは知らないが八夜の交友関係も広いものだ。

「でも良かったわ、永久子さんがいてくださって。いつも女性は私ぐらいで心細い思いをしましたの。」

「私も今日が初めてですの。八夜さんに誘われて来たのですけれど何だか緊張してしまつて。私も女性の方がいらっしゃってくれて安心しましたわ。」

「私は単純にこの分野に興味があつて来てますのよ。そこで偶然八夜さんが声を掛けて下さつて。」

「こんなむさ苦しい所に美女がいたものだからつついね。」

「やめて下さいな八夜さんたら。また奥様に嫉妬されては敵いませんわ。」

弥栄子は八夜が既婚である事を知っているらしい。

「ねえ、永久子さん。永久子さんてお呼びしても構わないかしら？」

「もちろんですわ。私の方が年が下なんですもの。」

「幾つも離れていないんですもの、私の事も名前で呼んで頂いて結構よ。どうぞ仲良くして下さいね。」

そう言うてにこりと微笑む弥栄子はとても艶っぽく美しかった。

第二十四章 「弥栄子」(後書き)

また気付いたら間が空いてしまいました……；

そしてまた登場人物が増えたって言う……いつになったら終わる
んだろう？

ぶっちゃけまだ半分も行っていないっていう^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4487e/>

女に生きた女

2010年10月10日18時02分発行